

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Diary of Hisakatsu Hijikata (I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001075

土方久功日記 第7冊

1924年11月9日～1925年7月5日（大正13・14年）

解説

この第7冊では、ノートの見返しに、

亡き父上に。

私はあなたから生まれました

此の事は私にとって最も

重大な事実です。

と書かれているのが注目される。

この時期、久功は、詩を書き、彫刻を制作し、展覧会を見、演奏会に行き、読書し、そして、築地小劇場に通い、一見充実した生活をしているように見えるものの、実際は毎日が虚しい日々であった。この先どうなるのか、全く見通しがなかった。父親にすがりたい気持ちだったのであろう。このころ、しばしば、茅ヶ崎に父親の墓参りに行っている。

大正13年（1924）の歳末、久功は、一年を振り返っている。日記には、次のように記されている。

「先づ今年は一月から十二月まで、何かかにかぶつぶつ怒って来た。一年中檻を感じて来た。檻と戦ひ檻を呪ひ、さてどうやら檻に負けて来たかに見える。一年中怒り続けて来た自分を、けなげに思ふ。けれども亦、腑甲斐ない、だらしのない自分をみじめに思ふ方が本当のようだ。」（12月28日）

日記には、久功が原始美術への関心を持っているを示すことが記されている。大正13年（1924）11月19日の記事に、前日兄・久俊が、大学の図書館から、南米のアルカイック・アートの素晴らしい写真版の入った本を四五冊借りてきたのを、久功は模写している。20日以降も、数日の間、熱心に模写している。

第7冊で、久功にとって最も大きな出来事は、台湾への渡航であろう。大正14年（1925）3月28日の夜、東京駅で、母親、弟、妹をはじめとする、多くの人たちに見送られて、夜行列車で神戸へ向かった。翌29日の昼、江波知彰とともに、神戸で「吉野丸」に乗船し、台湾へ向かった。数日の船旅の後、4月2日の夜明け、台北に近いキールンの港に着いた。

台北では、その翌日から、名所・旧跡をはじめ、博物館、動物園、植物園などを訪れ、それらは久功の好奇心を満たしてくれた。異文化との接触は、久功には初めての経験であった。初めの2カ月ほどは、旧知の人たちにも会え、楽しい日々を送ることができた。しかし5月の半ばから、台湾総督府と台北州庁の仕事を掛け持ちするようになってからは、仕事に追われ、かなり疲れてきた。しかも、5月を過ぎると、久功の大嫌いな雨がよく降った。帰国も間近、仕事も追い込みにかかったころには、日記には天候しか記されない日が10日ほどもあり、さらには、そのあと、何も書かない日が一週間も続いた。その間、久功が、どのような生活をしていたかが想像できよう。

台北での仕事の具体的な内容は分らないが、久功たちは、彫刻家としての技術を生かして、大きな模型を組み立てて、ペンキを塗るようなことをしたらしい。この仕事に対して、久功は、「恥づかしい仕事」と日記に書いている。しかし、この仕事で、当時としては大金の1,285円（ペンキなどの材料費、渡航費、滞在費等を含む）を手にした。そして、帰国を前に、理蕃課の即売品を大量に買い込み、街に出てお土産をととのえた。

6月21日、キールンから、台湾へ来た時と同じ「吉野丸」に乗り込み、門司、神戸を経て、26日、3か月ぶりに東京へ帰ってきた。

3か月の台湾滞在は、久功にとって必ずしも満足できるものではなかったものの、亜熱帯の地・台湾で異文化に接した経験は、岡谷公二氏が述べているように（『南海漂泊』52頁）、4年後のパラオ行きに影響を与えたことは間違いなからう。

[7 ^{〔表紙〕} 千九百二十四年 十一月九日より 千九百二十五年七月五日迄
大正十三年 大正十四年 功]

^{〔見返し〕}
[亡き父上に。

私はあなたから生まれました
此の事は私にとって最も
重大な事実です。]

十一月九日 日曜日

烈風の中を青山の墓地に行く。直矢叔父様の一年祭。別に他の人も居ないので、帰りに一同で四谷の三河屋へ行って、御飯を食べる。

^{〔欄外に記す〕}
[何にも云はない]

或夜

私は私の薄暗い部屋に居た
私は机に向って
冷たい肘つきの籐椅子にうづまってゐた
机の上に
あまり立派でない銅製燭台の上に
一本の蠟燭が燃えてゐた
幽かな黄色い光が

海老色の机掛の上に
奇怪な影をゆらめかせ、煽った
隙間風が通り魔のように
冷たい息を吐いて通った
（外の風を聞かないか
かたくなった木の葉が
枝が枝を打ち
葉が葉をからんで飛び
乾いた土を掃き
大粒の埃と共にまろび
あゝ、その音を何といたらいいだらう
或は響といはうか
轟きと、呻きといはうか
勝ちほこるものの疲れた悲痛な声を以て
風軍は進む
風軍は乱れる）
私はぞっとしてあたりを見まはした
平たい壁は黙って何も云はない
壁に落ちた泣道化の首
あゝ、影——底知れず黒い影は
小心らしく顫へて何も云はない
ちっとして蠟燭に眼を返すと
黄色い光はぼうっと大きくもなり
静かに薄らいで遂に消え入るかも……
けれど光も亦
私には無関心で、黙って、何にも云はない
私は薄暗い部屋の中に耳を傾けた
眼からさへ聞かうとして
物から物を、隅から隅を見まはした
けれど目も亦何にも聞かなかった
何にも聞かなかった
部屋中のものが
暗くて、静かで、黙って、動かない
何にも云はない
何にも云はない

そうして私の心は段々に
荒涼たる平和の中に安らかに眠ってゐた³⁰⁰⁾

[×を附す]

[欄外に記す]
[墓場の記憶]

私は私の薄暗い部屋にゐた
私はいつものように机に向つて居り
机の上に
一本の蠟燭は
いつものように静かに音立てず燃えてゐた
私の前に自作の面像がある
青銅の肌が蠟燭の光で黄色く又黒く……
あゝ、それは永遠の沈黙である
幅広い額、厚い唇
恐ろしく縦長い半眼の面像は
私に此上なく懐かしい
無量の言葉であり、意味である
「父」の面影であり
あゝ、思ひ上つた此の私
これは淋しい遙かなる過去と未来とをつづる「物語」である
只々灰色の硝子戸に
そら恐ろしい影がふやけてゐる
聖心を阻む魔道か
表裏の真理か
否、正邪を分たぬ誘惑である
目を閉ぢて私は墓場の記憶を呼んだ
二十日前の曇り深い昼さがりだった
私が墓場に行きついた時
既に二人の夫婦が三尺の赫土〔掘〕を堀つて重い蓋石をおこして居た
厚い蓋石の下に更に蓋石があった
重々しい二枚の蓋石をおこして
その下に私達は大きな水瓶を取り上げた
黒褐のぼろへゝの人骨が
水瓶にいっぱいまつてゐた

私達は更に近く
 土を掘り、二枚の石を上げて
 今一つの同じものを得た
 あゝ、二つの舍利骨は懐かしいものだった
 一つは私の曾祖父であり
 一つは私の祖伯父である
 この二つの大きな水瓶で
 私達の「先祖の墓」蔵は殆どいっぱいになった
 私は小半時二つの舍利骨と語った
 永遠の沈黙に帰った二つの舍利骨
 それは私に
 無量の言葉であり、意味である
 世の「父」の面影であり
 生きたもの、やがて生きるものの絶対姿である——
 私は眼を開いて、胸をはづませて
 私の薄暗い部屋に甦った
 冷たく冷えきった足先と
 外の夜の静かな嵐と
 そして灰色の硝子戸に
 そら恐ろしくふやけた影と
 黄色く消えかかった蠟燭と
 あゝ、残忍な空心と——

〔×を附す〕

〔欄外に記す〕
〔六つの彫像〕

私の薄暗い部屋に六つの彫像がある
 「神聖なる面像」と
 高ぶった「女の首」と
 憂鬱な「首無しの裸身」と
 奇怪な「変質者の狂舞」と
 すなほな「娘」と
 小さい「猿人の顔」と——

暗い夜だった

全き静寂の中に
少しの風もなかった
蠟燭の黄色い焰が
不断に、執拗に、満たされない心で
ちりちり揺れとほして止まなかった
青白い月影が冷えきった硝子戸にさした
薄暗い部屋の中に
見えないものが見え
聞えないものが聞え出した
それは恐ろしい一瞬だった
だがそれは又悲壮な伴奏だった
主題が直ぐ後に続いた
六つの影像は
伴奏の和音の一つ一つを受取って歌ひ出した
恐ろしく憂鬱な呻きがあった
恐ろしい奇異な叫びがあった
冷やかな音調があった
可憐な声があった
壮重な意味があった
蛮怒があった
極めて美しい調和と、胸を悪くする不調和とが
一時と他の時と
時を追うて合致し、乖離して入乱れた
私は極度の緊張を以て聞き恐れた
私のはっきりと聞き、はっきりと記憶した
(—憐れな人間だ
 憐れな人間だ
.....
.....
—馬鹿だ、お前は馬鹿だ
—私達はお前から生れたが
お前より利口で
お前よりもはっきりして居る
—お前はお前の最も真剣な一瞬を
〔固カ〕
個定と永遠の私達に注ぎ入れた

——私はお前から生れてお前よりも敬虔だ

——私はお前から生れてお前よりも憂鬱だ

——お前は恐ろしいものを作った

私は狂って居る

だから私は踊るのだ

私は悲しいから踊る

私は嬉しいから踊る

私は永久に踊る

私は永久に踊る

——私はお前の蜜心の強調だ

だからお前は私を忘れることは出来ない

お前は私を恐れてはならない

お前は私を蔑んではならない

お前は私を決して忘れてはならない

——人間だ

常に二つのものの中に居り

常に二つのものを望み

常に二つのものの為に苦しみ

常に二つのものを呪ひながら

遂に二つのものから離れることは出来ない

——私は愛する

私は愛する

私は愛することを少しも耻ぢない

私は娘だ

私は娘であることを耻ぢなければならぬか

それなのに

なぜ人は愛することを蔑しむのだ

なぜ人は愛することを耻ぢるのだ

私は決して娘であることを耻ぢない

私は決して愛することを耻ぢない

それなのに私は唯人がこわい

私はただ習慣がこわい

私はただ伝統がこわい

——お前は私達に立衝くことは出来ない

私達の言葉はお前の言葉であり

私達の姿はお前の姿であり
私達の望みと悔とは総べてお前に帰するのだ
私達はお前なのだ

.....

.....

——偉大な人間だ
偉大な人間だ
おそろしい人間だ
——お前は六つの私達を作った
お前は七つの私達を作る
お前は百千の私達をも作る
——お前は望むものを得る
お前は闘ふものに勝つ
お前は不断の努力を捨てない
お前は絶望の底にも望を持つ
お前は成長する
お前は永続する

.....

.....

——つまらない人間だ
つまらない人間だ
小さな人間だ
——お前は得たものを失ふ
お前の得たものは何か
お前は勝ったものに負ける
勝つとはどんなことか
お前の努力は何の為か
不断の建設は何の為か
お前は望のうしろに絶望を持って居る
お前は望のうしろに悔を持って居る
お前は死んで土になる
お前の子も死んで土になる

.....

.....

——人間だ

人間だ
人間だ
……………)
合唱は夜中続いた
矛盾が飛びかはした
雑音が耳を聳した
不調和が胸を痛めた
けれども又何と美しかったか
何といふ誘心をそそったか
何んな懐かしい夢を送ったか
何といふ誇心と驕傲とを教へたか
合唱は続いた
合唱はいくらでも、いつまでも続いた
だが夜明は別な交響を以て
灰色の硝子戸の外から
満ちあふれた足どりで迫った
現実の伴奏を従へて
そよ風の天使を載いて進んだ
太陽の王が遠く後から統帥叱咤した
そして私の薄暗い部屋に
最後の蠟燭が消えた時に
机の上に
台の上に
そっちに
こっちに
六つの彫像は灰白い埃を浴びてゐた³⁰⁰⁾

[×を附す]

十日

風があるので、障子を閉めて背中にはかへ〜と日を受けて書物をして居ると、江波から手紙がとどいて、間もなく昼近く、江波と原瀬とが絵具箱を下げてやって来る。午後、風の中を三人でスケッチに出かける。春頃まで一面の田畝跡だった処に、小さな家が立塞がってしまつて、どっちを向いても直ぐに目をさへぎられてしまふ。散々ここでもない、あすこも駄目と歩きまはった上句、高円小学校の近所で休み、思ひ〜の処を画き出す。自分も水彩を一枚画くうちに、短かい日はすぐに暮れようとしてまだ日があつた

て明るいのに、手の先が冷たくなってしまふ。

十一日

朝のうちに、石膏屋が来てくれる。丁度昼までかかって石膏屋が帰ったので、食事後、江波の処へ行く、と宮田が来て居る。江波の処で車をたのんでもらって、花台をもって小石川に夕方行く。叔母様の処で夕食をいただいて、十二時前に帰って来る。

十二日

朝から兄と三越に行き、丸の内ビルディングに行つて、昼に帰って来る。

十三日

ほかへと暖かい日が続く。昼間中のんびりして、無精たらしい日が続く。^{〔鳥脱カ〕}百舌も鳴かなくなってしまった。此の三四日、朝覚めて縁先に出ると、家内の小さな庭は固くかわいて居るけれども、生垣の向ふの菜園の柔らかい土に真白い霜が降りて、朝の一時が大変に寒い。それから八時半から、永いこと三時半頃までの縁近い室内は、まことに閑かである。それから夜が更けてゆくと、再び冷た冷えと寒くなる。四五日前から月が円く、白々と明らかに照って、夜が益々静かになってゆくが、寒いので、外からでも夜に入って帰る日よりは、月を見ることもない。

十四日

こんな暖かい日には、外に出ないからと云って、家に居て何が出来るといふ訳のものではない。終日日向にうだりかへって、それでも何かしようとする気はあると見えて、本などやたらと引張り出すのだが。そして、反対に日が暮れると滅法寒くて、今度はふところ手でもして顫えなければならない。そして夕方になって、轟々と風が鳴って、一緒にざんへと雨が降る。けれども、三分の後にはあたりは静まりかへって、近頃では蟲も鳴かない。床に入ってまでも本ははなさず、ペンは握って居ても、昼間うだりきつた頭はなかへさめてはこない。

其のうちに、体の方は足の先から凍えて来て、馬鹿らしい、上を向いて寝るんだといふ。で、そのように上を向いて寝てしまふ。

十五日

相変らず天気はすばらしい。昼間の間、暑いようである。

朝のうち、石膏屋が来てくれたので、半日ぶらへと日向ぼっこをして居る。今日は、久々で——全くそんな気がする。長い長い二週間のような二日の後である——午後三時半に家を出て、一寸田辺サンによって、築地に行く。小山内氏の出し物、ストリンドベ

ルクの「一人舞台」(強者³⁰²⁾)及「稲妻³⁰³⁾」の初日だ。「一人舞台」は全く見ない。「稲妻」は全部見ることが出来た。

十六日 日曜

晴天。朝のうちに川路氏をお尋ねしたが、玄関で会れると、川路氏は、着物をきちんと着換へて居られる。「今日は、少しばかり忙しいので……少しでしたら何卒上ってお話し下さい」。で、自分は少しといふ意味をはっきり知らないので、再びお尋ねするように云って帰って来る。直には家に帰らないで、上原サンに行く。丁度多摩チャンが来て居たが、間もなく何処かへ出かける。前後して川上の叔父様が見え、皆でおそばを頂いて、十二時半頃帰ると、直に今度は日比谷に出かける。音楽堂の切符を持って居たので、遅くなって入ったが、別段のこともない。

久しぶりで日比谷公園の中を歩いたが、実にきたならしい。久顕サンに逢ひ、一緒に銀座を歩き、尾張町で別れて、自分は小劇場にゆく。今日も「稲妻」だけ見る。なかへいい芝居だ。なかへいい芝居だ。だが何だか物足りない。不思議な芝居だ。意識して注意すればする程、丁度それだけ面白い。どうかしてぼんやりして居ると、丁度それだけつまらなくなる。不思議な芝居だ。恐ろしい芝居だ。だがその恐ろしさがわからない。半分理性から入って来るようでもあり、半分感覚を通して来るようでもある。其くせ何処かで、もう少し恐ろしみがほしいといふ気がしてならない。役者が上手な^(ママ)のだから下手な^(ママ)のがか、まるでわからない。誰一人上手な^(ママ)のだから下手な^(ママ)のだから、まるでわからない。

十七日

朝神田に出て来る。

カイザーの「朝から夜中まで」と、トルラーの「ドイツチェヒンケマン」を読む。カイザーの小さな一幕「クラウディウス」も附いて居たので読む。これは、カイザーの一九一二年の作で、何だかシュエツラーの「猛者」を思はせるような伊達気分がある。カイザーの縦横な技巧には、実に感心する。けれども、自分は先達読んだ「群集人間」と共に、トルラーに引かれる。尤も「群集人間」と此の「ドイツチェヒンケマン」とは、表現的には一寸趣が違ふけれども。

十八日

昼間うちは暑いようだ。何にもする気がしないで、終日縁側の寝椅子に寄ったり、畳の上にごろへ転んだりして居ると、物足らなくもあるけれども、又こんなにして居られるのももう暫らくだとも思はれて、さてやっぱりそんな風にして居る。

アンドレーエフの「黒い仮面」を読む。構想があまりにくどいようではある。従って、あまり読み易くはないけれども、亦珍しいものでもあり、甘い残忍さ、気味悪い快感

もある。「星の世界」と、これとはまるで較べてみられないが、「なぐられる彼奴」とは、一派〔脈カ〕のかようなものがある。嗜好から云へば、自分は「なぐられるあいつ」或は「アナテマ」をとる。夜は築場〔地〕にゆく。今日は、「一人舞台」（強者）を見る。夫なき夫人の、田村秋子氏がいつになく変った役をもって、而もなかへうまくやって居る。夫ある夫人としての室町歌江氏には、大分注文したいようなものがあるが、退屈するようなことはない。終日頭が痛い。

十九日

空気が乾燥しきって、頭が痛い。午後から築地にゆき、カインツのマスクを持って、夕方石膏屋へまはったが、留守だったので神田を廻って帰る。昨日兄が大学の図書部から、南米のアルケイック・アートのすばらしい写真版の入った本を四五冊借りて来てくれたので、自分はぼつへスケッチをとって置かうと思ふ。で今日も木炭で十枚程写した。

二十日

昨夕あたりから寒さが薄らいだようだったが、今日は一日暖かかった。朝は霜も置かない。雲が深かったが、日は照って居た。朝から、珍らしく室の模様変へを思ひたって、大工道具を持ち出して、棚を吊ったり下ろしたりして居たら、昼前になって江波がやって来た。江波が帰ってからも、——丁度其の時分から日がかげって、雲が厚くとぞして、真暗になってしまった。大分天気が続いた。もう長くはもつまい。夕方になって四五枚模写を続ける。

二十一日

雨が降って居る。半日烈しい雨が降って真暗だった。けれども、昼には止んで日が照った。時々暗くかげったが、夜は星が鋭く光った。小石川へ行って、モイツレイのマスクを持って石膏屋へ行き、晩築地に行く。築地では久しぶりで、上田秋夫に逢った。相変わらず体が優れないらしい。近頃は詩を書いて居るといつて居た。今、中野の桃園³⁰⁴⁾に居るといつて居た。近日ゆっくり会ってみたい。

二十二日

ほかへ暖かい縁側で、石膏取りをしたり、MEXIKO 古物美術の模写をしたり、ぼんやりして居たり、お茶を入れたりして、独りで暮らす。夕食後、石膏屋にゆき、江波の処へ寄る心算だったが、気になるので、一寸築地に行く。帰ってみると、江波と原瀬ともう一人誰か三人で尋ねて呉れたのだった。

二十三日 日曜日

時たまに弱々しい日の光がのぞいたりしたが、終日寒々と曇って居る。朝、薄暗い部屋で何するともなく、けれども何かしようとして居る処へ、三沢寛が尋ねて来る。家で一緒に午餐をすませて二人で江波を尋ねる。江波の処で三人で夕食ををへて、九時半に家に帰って来る。

私は私の薄暗い部屋に居た
只一つ、北側の四角い窓からは
十一月の曇日が仄かな白光を投げてゐた
何処からとなくうす寒いものが膚を這った
そして私はまだ焚かれないストーヴを目で見えてゐた
其時私は窓の外に動く蔭を感じた
それはあっちからこっちへ
こっちからあっちへと動いた
誰？——と私は口の中でつぶやいた
私はまた窓の外に幽かなノックの音を感じた
再びずるそうなノックの音を私は聞いた
誰？——と私は心で思った
彼女だ、彼女だ！
突然私は胸をおさへたか目を瞠ったか
けれども鋭い理智が亦ひらめいた
不幸な理知は決して奇蹟を信じない
——彼女は行ってしまったのではないか
彼女は遠くお前から離れてゆき
そしてお前も亦彼女を追はなかったのではないか——
そして（恐らくはその為かも知れない）
そこに居たのは彼女ではなかった
又他の何ものでもなかった
私はもう決して彼女を見ないのだらうか
或はそんな日が再び来ることはないのか
私はふりかへって彼女を思った
或日
彼女が異常な畏怖と畏慕とを以て
壮重な抑圧を以て私の前に立った

(それは私への挑戦であったのか)
だが、次の瞬間に
私は彼女を気のおけない友達として恐れなかった
それとももっと悪ければ蔑んでみた
或日
彼女は淫蕩な笑ひを彼女の赤い唇で笑った
(それが私への挑戦であったのか)
だが、次の瞬間に
彼女は私の小さな顫える手をさへ受けようとはしなかった
或日
彼女は健康な子供達のように快活だった
(どんなに彼女が無邪気だったか)
だが其の時私はあまりに老ひほほけた心だった
或日
彼女は心からの涙を以て私の信頼に訴へて来た
(それはどんなにいちらしい姿だったか)
だが其の時私は無慈悲で、残忍で
胸の戸を堅くとぎして応へなかった
斯くて彼女は私から去り
私は彼女を追はなかった
彼女は既に遠く彼方に居り
そして私は私の薄暗い部屋にゐて
ふりかへって彼女を思って居る
私はふりかへって彼女を思った
だがそれは何といふ空虚な(片心)だったか
そこには例へば過去のな憂愁がなかった
そこには現在のな享楽がなかった
未来的な恐疑がなかった
あゝ、それならば彼女こそは私の鏡であったのだ
又私の暗い影であったのだ
人は常に鋭い鏡の反響に醒め
又優しい影の追従に慰められねばならない!
それならば彼女は又、今
何処かのはてに裸身の彼女を歎いては居ないのか
片身の彼女を泣いては居ないのか

そして二つの同じ思が相結ぶことが決してないのか
二つの同じ心が遠くからでも呼び合ふことが決してないのか
窓外に動いた蔭がそれを説明しないのか
ノックの音が何ものをも意味しないのか
あゝ、けれども、けれども
不幸な理智は決して奇蹟を信じない
そして私は私の薄暗い部屋の中に
十一月の曇日の仄かな白光の前に
うす寒い思ひを膚に
冷たい、まだ焚かれないストーヴを目で見て居た

〔×を附す〕

十一時半になって、外には雨の音が聞え、烈しく降って、堅い木の葉さへ鳴ったが、一時間の後、十二時半には再び雨も風も過ぎて、静かな夜が冷え〜と寒い。

二十四日

からっと晴れ渡って、風のない縁先に、初冬の日が暖かい。朝から榎本がやって来て、昼前から酒をもらって閑かに喋り立てる間、風呂から上って弛んだ心を、ごろ〜と寝そべって居た。夕方から築地へ出かける。

二十五日

午後、散歩のつもりで上田の処をさがして歩いた。それでも、一時間もしないでみつかったが、留守だったので、鉛筆を買って来て、書置きを投げ込んで帰って来る。夕方五時四十分の汽車で鎌倉に来る。

二十六日

昼前は、子供の相手と日向ぼっこで閑かに過し、午後、湯地の処に出かける。帰る前に秋田氏の処につれられて行って^{〔紹〕}照介される。晩は大変な風になる。

二十七日

朝から茅ヶ崎へ廻って父の墓詣りをして、東京に帰れるときめて居た——一昨日からきめて居て、今朝までそのつもりで居たのだが、駄目だった。私は、まづ鳶村さんに行かなければならなかった。茅ヶ崎にはゆっくりゆき度い! だから私の計画は、ここでもう八分以上ぐらついてしまつて居た。師範学校の所で和子サン³⁰⁵⁾に会った。おばさま

は十時の汽車で東京に出られるといふので、急いで行った。が結局一時間の後におば様にお逢ひすることが出来た。そして帰ると昼前だった。茅ヶ崎行は止めた。一時三十八分の汽車で東京に帰って来る。

二十八日

朝半日を大工のまねごとをして過してしまふ。早昼で、上野の音楽学校にゆく。明日、明後日の秋季大演奏の総練習である。第一が、絃楽付ヴァイオリン（二短調競奏曲^[ママ]パッハ）。これは、コンチェルト、フォアトゥー、ヴァイオリンスとして、三つの楽章ともよく知って居たので、それに絃楽の伴奏が付くといふので、興味を以て聞いた。第一ヴァイオリンが安藤幸子氏、第二ヴァイオリンが多久寅氏だったが、三つの楽章とも、あまりにうまくゆかなかつた。第一楽章は、自分が曲そのものをあまり好かないし、第二楽章では、多氏がひどい失敗をしてしまったし——多氏は、中途ではぐれてしまって、クローン氏が指揮台からメロディーをつげなければならないようなことにまでなってしまった——第三楽章も亦たいして綺麗にゆかなかつた。テンポが遅いので気がぬけたし、其上ここでも多氏のヴァイオリンは全く音が出ないようなことさへあった。

第二が、高音独唱^{フィンクスト、カンターテ}「聖霊降臨祭唱詠曲」中の抒情調（パッハ）、「夜鶯に寄す」「永遠の愛」（ブラームス）で、今度新らしく音楽学校の教師として来朝したマルガレーテ・ネトケ・レーヴェ氏がはじめて歌ったのだが、先づ平凡と云ってよからうとさへ思はれる。

そして第三が、管絃楽及合唱 第九交響曲（ベートーヴェン）だ。すばらしいものだ。兎も角、すばらしいものだ。全く知らない曲、殊にこうした複雑なものに対して、自分は全くの無智だ。だから演奏に対しては、何にも云へない。全くクローン氏が、まるでやり直させた処でも、亦クローン氏が不服さうに首をふって居る時でも、自分には少しも何ともなかつた。だから、自分は只此の異常な大交響曲の一刻から一刻への交響の快不快の中に、又全体に対する満不満の中に居ればいいのだ。自分はすばらしい近代的な詩想の中に跳ねまはって居た。自分は大変に込み合つて席がなかつた為に、いつになくオーケストラの真下に腰かけて居た。で、これがまた其の一つの原因にもなつたらしい。自分の今日の此の異常な快感を、何と云つて説明しようか。あまりに近い処に居たので、烈しい音がばらへになって自分に飛びかかつて来る。そして、全体の調子が最も高く烈しい時でさへ、其の中の個々の爆発、怒号、喚声が更に鋭どく頭の上から降りかかつて来る。そこで自分は、此の大混沌の中に、迪に逆転し、跳躍し、ぶんなぐられ、撥返り、叫び、踊り、痛み、そして思ふさま笑つた。尤も第三楽章の間、自分は幾分落着いて居て、又物足らなくもあつたけれども、終曲の大大大大——は、総てのものを、一切のものを償つて余りある。四重唱の中で、舟橋栄吉氏は、又沢崎氏は、無茶苦茶にどなった。長坂好子氏は、声が出なくなった。更に多数の混声合唱は、殊にソプラノは、思ひきり高い調子で叫び、又吠えた。だがそれらが、此の大混沌に更に力を加へた。自分の詩想

に火と風とを送った。突如として終りが来た時、自分は他界の地上に全くたたき落とされた。あゝ、力は常にうまい下手の上に在る。善い悪いの外に居る。自分は、来月六日の同じ音楽会の切符を買ふように文ちゃんにたのんで帰る。

惣ちゃんを引っばって来る。惣ちゃん宿る。

二十九日

晩になって、ストリンドベルクの「債鬼」を読む。これは、自然主義的なものの一つだ。其故にここに現はれるトリックに対しては、全然賛成することは出来ない。にも拘らず、力と気持のいい憎しみがある。僅かに三人の人々の簡単な配対によって、実に複雑な事件の推移が克明に、或は余りに克明に画かれてある。それは私の好きな、正しいはっきりした、小気味よい「真理の一片」である。

三十日 日曜

終日変った妙な日だった。朝が寒く美しかった。九時に桃園に上田秋夫を尋ねる。片山敏彦氏が来る。十二時に家に帰る時には、しぐれて生温い南風がぬう〜吹き、午後半日すさまじく吹き続ける。夕方ばら〜と雨を交へたが、夕食後、動坂から築地へまはる。雨風は烈しくなる。けれども十一時に家に帰る時、雲が切れて風の空に星が光る。直ぐねる。

十二月

一日

夕方、兄と小石川へ行くつもりで、水道橋まで出て電話をかけたが、都合が悪いので明日行くことを約して、兄と別れて、江波の処へ行く。十一時に帰って来る。

ストリンドベルクの「貸と借」及「きづな」を読む。「貸と借」の主人公アクセル君を通して、幸と不幸の天秤が上ったり下ったりする。名誉と金とが、皮肉な唐草模様を織り出す。アクセル君は、俗人なのか、人間なのか、「ふん、ふん」と思はせる。「きづな」の伴奏として、法規の滑稽、判事といふ機械の出来上ってゆく道、牧師といふ職業、社会的無智識人と智識人との二つの無智等々が散りばめられる。開廷前の男爵夫妻と開廷後の男爵夫妻が、カイザーの「朝から夜中まで」の六日競争の観衆を思はせる。而して愛と憎しみとの対立と錯綜、反撥と妥協、その中を縫ってゆく事実。きづなであり、約束であり、運命である所の混沌こそ、作者の常に又熱心に係はらねばならない処の、作者自身の影であり、幽霊である。

三日

昨日は、夕方から小石川へ行き、お酒を頂いて、あんまり頂いて、前後全く不覚。兄と二人で宿つて了ふ。今日十一時に家に帰って来る。

四日

佑サン夫妻が十時に東京駅につくので、自分が迎へに出る。昼前に家に帰り、午後、佑サンと神田の東福田町に用を弁じ、銀座に出て、夕方家に帰る。忠久はチョコ〜歩くので、はら〜する。なか〜聞かない。

五日

久顕サンから言伝があったので、朝、久々に霜をふんで家を出、八時二十分の汽車で市川に青田幸吾氏を尋ねる。青田サンの家も遠がに皆出払って静かだ。両国駅で増子サンに会ったが、家には末子サンが一人居て、お人形を二つも背負って退屈しきって居る。青田サンと十時には市川を出、電車で押上に出、円太郎で真直に上野に出る。上野で昼食をとって、谷中の美術院に佐藤朝山氏を尋ねる。アトリエには保田竜門氏が製作をして居る。一時間程居て辞し、更に円太郎で駒込橋に出て、青田サンの普請場³⁰⁶を見にゆく。三時に青田氏と別れて、駒込から電車で家に帰る。忠坊も今日は、おとなしい。

夜になって、江波、原瀬、宮田がどや〜とやって来、十一時過ぎまで話してゆく。十二時半までかかってやりかけのマスクを仕上げる。

六日

朝からしぐれて、ひどく寒い。早昼で上野の音楽学校にゆく。文ちゃんが、自分にどんな席を取って置いてくれただらう。

あゝ、けれども、V二十二番。自分は疑ふ。そしてそのように面白くない。喧噪の中からの、更に刺戟的な蛮音が一つ一つ響いて来ない。其上、今日は第五回目の公演である。指揮者には、第一日の憤怒がない。団員には、第一日の狂奮がない。(自分は、第九シンフォニーに就いて言っているのだ。始めの二つは問題ではない。)最後の席に居る自分に、裂くような、目的のない本能的な競争から、群衆の中をかきわけ、がむしゃらになぐりのけ、乗越え、踏みつぶして飛び上り、忽ちはねとばされ、引下ろされ、くみしかれて、沸々たる群衆の中深く墜下し、忘れられ、時を得て三度、群衆の上に踊り上る、気狂ぢみた、出鱈目な、けれども、生々した蛮音のかはりに、稍美しい、稍調和的な、より美しい、より調和的な、けれども生温い、最もあぶなっかしい音楽が顫えて来る。これは何といふことか。情ない滑稽であるか。ベートーヴェン第九シンフォニーの美しさは、百段の上に在るのだぞ。更にベートーヴェン第九シンフォニーの蛮力は、更に百尺の地下に埋もれて居るのだぞ。第三楽章を聞け。こんな生温い美しさを、だら

へと聞かされ退屈しない心があるか。けれども、V二十二番。自分は感謝する。表現派は、否、表現派は知らない。最近代精神は、この地下百尺の美を感じたのだ。呪はれたV二十二番。今日の音楽会は、まことに金一円の価値だ。

寒い薄暗い夕を、本郷三丁目まで歩いて、青木堂の二階で、暖かいココアにありつく。即ち景気をつけて、築地小劇場にゆく。カイザーの「朝から夜中まで³⁰⁷⁾」の、今日が第二日だ。今度は稽古もちっとも見なかったし、舞台も小さな模型だけしか見て居なかったので、期待を以て居た。先づ順々に見てゆく。正面から劇場に入ると、いつものように幕が下してない。舞台は開っぱなしで、観客席と共に大びらに明りにさらされて居る。村山知義氏の^{〔設カ〕}設計で、構成主義と銘打って居るだけに、成程変っては居る。けれども、舞台だ。村山氏のいつもの絵? から見ると、多分に装飾的なものを含んで居る。

十六日間、飾りっぱなしの舞台。其上多大に活劇的な場面をもつ舞台だけに、がちりして居る。

舞台は三段に積上げられ、下の部が三つにくぎられ、二段目が両側に分れ、中央部が下の中央部と縦の延長をとって居り、最上部が中央に幾らか斜めになった手すりがかこまれて居る。そして、上手の空間に天井から中央二階に、ゆるい綱梯子^{〔ママ〕}が吊られて居る。全体が白の基調で、黒、印度赤、黄等の不思議な線と形とで飾られて居る。先づこの位にして、芝居が始まると、一度舞台を闇にして、第一場、銀行の場が第一層上手の一部にスポットライトによって浮び出る。以下舞台は此の意気で、第二場、ホテルの場が二階下手に、第三場、雪原の処は天井からの綱梯子から出納係を下し、同じく上階下手の場の中部よりの小さな場面だけを用ゐる。第四場、出納係の家庭が二階上手に、第六場、踊り場が第一層の下手に、第五場、六日競争の場が最高部に、そして最後の教会の場が中央一層二層をつらねられて出来上る。

さて、この七場の間、一度の休憩もなく、僅かな闇黒を必然的に用ふることによって、活動写真的に場面を進行させてゆく。で説明はこれだけに止める。

七日 日曜

昨日の続きを、^{〔例〕}面当臭いけれども簡単に書く。台本そのものがばらへであるように、此の演出から受ける感じも亦ばらへである。其中で、読む如くに出納係だけが一貫して居る。一場一場が極めて興味あるものであるにも係らず、一つの勢、流れるような、飛びまはるような勢がそがれるのは、一場一場の活動写真的な進行の間の闇黒のポーズが、唯一な原因であるらしい。此処に必然的な、或は殆ど不可抗的な不徹底がある。一場面が時間的に、今少し長く、ポーズが今少し短いならば、それだけこの傷は軽くなるのだが。六日競争の場面は愉快である。舞台裏のエフェクトも徹底的である。めざされた滑稽が出て居る。処で此の滑稽については、此の劇の何処にでも見出されるものである故に注文がある。即ちこの演出から受ける滑稽の大部分が失敗して居るように思はれ

る。演出者が此の滑稽に、殊更らしい意味を持たせないでくれたこと〔^{欄外に記す}強ひないでくれた事〕は、有難い。(真面目を看板にするものがよくやるやつだが) けれども役者が此の滑稽を、空気として生かしてくれなければ、効果は失はれなければならない。処で第一場の例を見よ。生方氏の「太っちょ」には、全く閉口である。そしてこんな滑稽は、とても堪らないものだ。其次に、今一段高い処で、最後の救世軍の場で見える滑稽は、先づ相当ではある。けれども、救世軍士官達の口調及び群衆の中からもれるヒヤカシ口調は、全く概念的な写実以上でない。これでは、救世軍の実際、実に同情を持つものの憤懣を買ひ、反感を持つ多くのものらの私的快心を買ふ以上に、あまり飛びぬけて居ない。其意味で、此の場面の中では、台詞をはなれた、伴奏的な歌及び金を拾ひ騒ぐ群衆によって、今一つ高い意味での滑稽が、どうにか保たれるのである。役者の大部分が、広い意味でのユーモアを持たない、或は^{解力}理會しないこと、まだ――遙かなる感がある。六日競走の場に比べて、踊り場のエフェクトは、はなやかなうちにも、あの三文楽隊のような管をやめて、^{日脱力}絃ばかりにしてほしい。同時に六競走の方ももっともっと乱暴でいい。といふよりもっと多量の方がいい。

千田是也氏は、立派なものだ。場面としては、雪原の場などが不思議にいい。それから、家庭の場が全く別な色彩によって、気持のいい効果をもって居る。それから、六日競走と会堂と、千田氏を助ける他の多くの役者は、沢山の役者がチョッと出てはチョッとひっこむといふ具合の為に、脂が乗る所までゆかないのは無理ない。

寒さが足りない。夜明前から降り出した雨は、大きな雪を交へて――一時は雪ばかりになり、あたりは薄白いまでになったが、^{ママ}ちき止んでしまふ。そして、終日曇って暗い。終日室に居に、火鉢をかかへこんで、腰が痛い、膝が痛い、頭が重い、何にも出来ない。

八日

晴天。晩、築地にゆく。ホテルの場の中程から終ひまで見たが、一昨日に比べて、今日は大変にいいと思った。否、寧ろこれでもいいのだとも思った。例へば一昨日、自分が問題にした闇黒が、今夜どんな風だったか。寧ろ成功したと思はれるのである。而して、自分はその原因をさへ確りと知ることが出来る。即ち一昨日は、特殊な事情から観客の範囲が広められて、殆ど場内にあふれた。この五百の観客のうち半数、或は三分の一は、劇場に対して不用意な人々だったのであるまいか(この日、慶応に小山内氏の表現派に関する講演があり、その聴講者のうちから、二百何十人の人々が実際見学として残ったのである)。兎も角、闇暗は無遠慮な咳ばらひと話声とでかき乱されたのである。自分は闇黒の時間にその原因をつけて居た為に、一昨日の断定を見出したのであるが、今夜の闇黒は、立派に、より静粛に保たれ、効果も大きくなって居る。勿論、相対には

ある。それから、役者達に対する感情も亦、幾分ちがって来た。役者達も幾分変わったらしい。と同時に、自分も亦親切になったのである。即ち、全体から個々へまで、自分の注意が行きとどいた上で、さて誰々の何処が悪いのか、悪ければ何うすればいいのか、何うなればいいのか——まで考へはじめたからである。又自分の方からの、或程度の妥協でもあると同時に、自分が「表現」をあまりに高くいかぶって居た——絶対的には尚もさうでなければならぬのだが——ことに気づいたからである。とは云ふものの、要するに程度の問題であって、例へば好い場と悪い場とが、あっちとこっちと変るほどの、大きな間違ひは決してなかった。

「六つの彫像」(一九二四.十一.九)「墓場の記憶」(一九二四.十一.九)「彼女は私の鏡であり影であった」(一九二四.十一.二三)「何も云はない」(一九二四.十一.九)上四篇をまとめ、『薄暗い部屋』からとして、日本詩人へ投稿。

九日

朝起きると、雪が降って居る。霽がまじってさらさらと音を立てる。それから、止む。又霽か雪が降り出す。そして、寒い、暗い。夕、又雨が冷たく降って来る。

十日

朝ちらへ雨降ったが、何の事もなく曇って、暗くて、寒くて、押付ける。けれども、午前中、薄暗い室に閉ぢこもって、昼に室を出ると、明るい暖かい日が眩しく照って居る。夜、築地へ行く。が芝居はちらへとのぞいただけである。早く家に帰って来る。又々鈍感がやって来たようだ。

十一日

晴天、風烈しく冷たし。鈍感は益々本物だ。其上、今晚の様子では、少しばかりセンチメンタリズムが手伝って居るらしい。何？ それでは、矛盾のように聞こえるといふのか。ちっともそんなことはない。

それから此の数日来の、否数十日来の単調に、大事件が来たことを記さなければならない。英子サンが今度、家のちき近くに家をもつことになったので、それから、鎌倉にたのんであった女中が間に合はないので、(勿論、佑サンは横須賀で、土曜、日曜でなければ帰らないし)、そして、荷物もついたので、いよいよ今日から引うつることになると、英子サンと忠坊だけでは無用心でもあり、さしづめ一番暇な自分がこしばらく宿りに来ることになったのだ。そして、夜九時になってやって来た訳だが、まだ何んな気もしないし。いやこれは又あまり大事件でもないらしい。

十二日

晴天。相変わらず終日お正月のような風が吹く。日向はあっても、霜は厚くて寒い。午後奮発。神田に出て、買物などして、渋谷に小山直彦を尋ねる。丁度出がけだったので、話しながら一緒に高樹町に出、高樹町で別れて、夕方家に帰る。

十三日

朝のうちにと、東中野に川路柳虹氏の家を訪れると、庭先に遊んで居た姉妹六つ七つと、四つ位ひのお嬢サンが勢よく門の所にかけて来る。「今日は。お父様はおうち?」、「お父様はいらっしゃらないのよ。何か会があって……」、「今朝おでましになって?」、「いいえ、昨日の晩……。私これからお友達の所へ遊びにゆくよ。」、「さう、よござんすね……。今日は学校は?」、「私まだ学校にはゆかないのよ。」そのうちに女中サンが奥サンからの言伝をもって来てくれる。川路氏は新潟に旅立ち、十五日頃帰る由。家に帰って新聞を見ると、川路氏の旅行が報じられて居る。日暮前に佑サンが出て来る。晩、築地にゆく。

(十一月三日 返信の続篇 (属篇))

二伸

無だ 無だ

総ては無だ

つまりは無だ

無が只絶対だ

(だが又、無も又、懐かしいものぢゃないか?)

勿論、けれども自分はいつまでもここに居ない

譬へばこれは千歳の大樹の幹に出来た穴うろだ

出来上った無であり空である

ここでは風に吹かれないように又

日を仰ぐことを許されない

やがて自分は小鳥のように細かい枝葉に帰るだらう

梢から梢に飛びうつり

花にはくちづけ

大空に向って歌ふだらう

そこで自分は又すさまじい風と嵐とに出逢ふだらう

自分は身を支へるだけにさへ渾身の血を必要とするだらう

自分は小鳥のように小枝にしがみつく

自分は自身の力を試すのだ
そしてそれを感じるのだ
そこに喜びがある
そこには又悲しみがある
そこに満足がある
否、そこには決して満足がない
そこに陶醉があり
そこに乱脈があり
そこに怒りがある、呪ひがある、命がある
狂気がある！
夢！——劇中劇がある
それは更に熾烈なる色であり、綾であり、香りである
そこには徹底がない
そこにあるのは只徹底的な不徹底だ
そこにこそ自分は在有を認め、生を感じるのだ
在有の意義を知り
目的——生そのものを生み、生かすのだ
生とは出来上るものへの道程であり
或は又出来上った永遠の混沌
生は変転する在有——価ではない
生は感情の雑沓
生は形式の混乱
生は活動であり、感覚であり、変遷であり、燃焦である
それ故自分は空虚な在有を否定する
それ故自分は在有の彼方に空と無とを見る
死であり、絶対である
又それ故在有は、生は
時たまここにも立入る
けれども生は又決してここに止まらない
生は走る
生はかけり
生は狂ふ
それ故自分は喜びを抱いて踊る
自分は悩みを背負って走る
呪ひを吐いてかけり

十六日

午後石膏屋に行ったが、留守なので、江波の処にまはり、夕食後、江波と二人で原瀬を尋ねる。

二時に家を出る

冬の曇日

灰色の空が低く垂れて

風、いかがはしい生温い風が

うろへとまごついてゐる

自分は郊外電車の終駅へと急ぐ

電車は既に用意されてゐる

飛び乗る

飛び込んで自分は全く気を挫かれる

人一人乗っては居ない

まるで張りつめた心が弛むと

自分は片隅に深々と腰を下して

疲れの為に全く前後を失ふ

二十分か或は十五分たって

自分は驚いて目をみひらき

四圍を見廻して更に恐れる

自分は見知らぬ、全く見知らぬ雑多な人群から

所せまくとりまかれてゐる

而も彼等は自分に対しても又互に対しても

全く平静を保ってゐる

だがそれが自分の夢と何の係りがあるのだ

自分は全く不吉な夢を見て醒めたのである

それは恐ろしい夢だった

だがそれは又気味のいい夢だった

だが又自分は決してその夢を思ひ出さない

自分は見知らぬ群衆の只中に

或は又それ故に心安らかに

自分の夢を思ひ出さうとどんなに努めたか

だがそれは無駄で外なかった

自分は電車を降りると雑沓を縫って

次の市街電車にぶる下る
人を分けて中に入るとむっとする
電車はのろ〜と進む
電車は堀割の橋の上で止る
臭気が窓から流れて鼻の下に蹲る
電車がのろ〜と進む
橋の袂に小さなカフェーがある
マントにくるまった書生が
目かくしの硝子戸を押して二人続いて中に入る
目かくしの硝子戸はどんなに人を引きつけるか
自分は永いことカフェーに入らない
あそこでは熱いコーヒーが高く匂ってゐる
あそこでは実のない菓子が舌と咽とを慰める
あそこでは上品でない、気のおけない女達が
只一ぺんの挨拶を慣々しい笑ひで報いる
あそこでは見知らぬ人々がみんな我家に在る心で
激論し、憤議し、いがみ合ひ笑ひ合つて沸騰する
あそこでは金が死に、時が死に
惜げもなく嘘とほんとは死んでゆく
さうだ自分はカフェーに行かう
だが電車はのろ〜と進む
電車は行く処にゆく
それから自分が最初に尋ねた家では
主人が居ない
用が弁じない
其れ故自分は盲目のように暮の街をかける
雑誌屋の店頭に
小供達が山のような雑誌をひっくりかへし、ひっくりかへし
呉服屋の反物に女達のつばきが飛ぶ
さて自分は二人の友を尋ねる
一人は「馬鹿げてゐる」といひ
今一人は「金がない」といふ
それなのに一人は高々とつべつに笑ひ
今一人の書齋にストーヴの火が燃えさかつてゐる
それなのに一人は誰彼の話をし続け

今一人は器用な手つきで狐色の暖かい紅茶にレモンを落す
郊外の夜気は鋭く
凍った道に靴の音が沓え
高い空、黄色い半月の下に
外套の襟を立てて、我が影を踏んで
けたたましいベルの音をあやぶんで、十一時に家に帰った自分！

〔×を附す〕

十七日

夜、築地へ

人波に巻かれて電車の中に押上げられる
人間の臭ひがする
朝ならばあさづけの臭ひが交り
夜ならば酒の香がむせぶ
更に甘酸っぱい埃だらけな香水が淀み
髪油の、化粧料の、膏薬の臭ひがあり
脂の、息の……の臭ひまで一々嗅ぎわける
さて汗ばんだ、塵ばんだ襤褸があり
暖かい柔らかい毛皮があり
更にごっつい肩甲骨が尖り
だらしのない臀肉が圧力通りに緩張し
ものすごいあらはな二の腕を感じ
皺よってざらへな手に触れ
目と目で張り合ひ、鼻と鼻で突き合ふ
さて、稀にはとんでもない別品氏が
私の隣りに押流される
彼女の薬指にほんもののダイヤモンドが光り
彼女の瞳に求むる心が燃えさかり
彼女の唇が謎のようにうすらゑみ
彼女の襟足から暖かいものが散り
彼女の胸に慕はしい二つのシュークリーム
彼女は暫らく決して私の傍から逃げられない
さあ諸君、見てくれ

冊を買って帰る。スキターレツの（アンドレーエフの回想）は、極度の興味を或は憂心をさへ自分に強ひる。

戯曲を通して、自分は三人の偉大な教父を持って居る。ストリンドベルクとアンドレーエフとバーナード・ショウと。アンドレーエフの生活を通して自分に投げられた、彼のより異常なる「アルコール的なもの」が、自分の影と幽霊に対する恐怖を、実にしみへとした恐怖を、密かな闇に燃えしめる。夜中の一時に、自分は更に有島武郎氏の（新旧芸術の交渉）を読み終へる。氏の神人と人神との最も高き深き争闘を読んで、あまりに理智的であり、更にあまりに感情的である（彼の小説を通して）ものの、互の葛藤を見る。けれども亦自分は此の氏に対しては、同情よりも憐情のより深かったことを告白する。其処には既に、時代的な間隔が感ぜられるからである。

氏の思想に、或はその解決にさへ満たされない時代を、自分は感ずるからである。自分は其故に此の問題を解決し、或は乗り越えて現在へ来たとは決して言はない。只自分はいつの間にか、時代によって此処に来たとは云へ、兎も角も自分はより自分らしく、より緊急なる別のものへの憧憬乃至より運命的なる（対問題的には積極的であったにした処で）道程にあることを、乃ち自分は氏の思想の直線上には居ないで、交錯する全く他の岐線に居ることを感ずるからである。

十九日—二十日

夜築地へ。築地で兄と一緒に、帰り銀座を歩き、十一時前ライオンに入って、久敬夫妻、小野宮吉³⁰⁸、伊藤罔夫^{〔千田是也〕}、高橋邦太郎³⁰⁹、八代³¹⁰、千早³¹¹氏と一緒に、プランタンにゆき、一時を過ぎて有楽町のオデン屋にゆき、三時前、千早、八代氏と別れて、皆で小石川へ行く。四時半就寝。二十日昼頃帰宅。

二十一日 日曜

午後三時四十分の汽車で鎌倉に来る。宿る。

二十二日

電車で藤沢に出、茅ヶ崎に十二時前につき、父上の墓参の後、お末様の処へ行く。四時の汽車で帰京。

二十三日

久願サンと午後築地小劇場の「子供の日³¹²」にゆく。小さい観客達の極めて露骨な無邪気が、実に愉快である。幕合には、鬼ごっこをするものがある。手をうつものがある。幕の下からのぞくものがある。訳もなく走るものがある。開幕中にもさけぶものがある。泣くものがある。のこへ席を立て、舞台をのぞきにゆくものがある。踊るものがある。

夜、中井サンが来る。宿る。

二十四日

午後三時に久頭サンと銀座に出て、明華菓子の階上に、吉田謙吉の展覧会を見て、京橋の方に歩き、カワヅで夕食して、銀座を更に歩き、ロシアにより、新宿に出て、葵橋の小さなカフェーに行つて、九時半に帰つて来る。

二十五日

(十月の或る朝——鎌倉にて)

舞台はあはれ深い
卵色ダリアの花の上である
三角のお尻をした小豆色小蜘蛛が
身の三倍にもあまる虻を必死でおさへる
虻も必死で双翅をぶんへんと鳴らすが
蜘蛛の手をのがれて飛ぶことは出来ない
虻の身がふわへんと浮くので
後脚でしっかり花びらの縁につかまってゐる
沈黙の無表情の蜘蛛にも
同じ全身の努力が漲る
受身の虻が苛々とあせつてもがけばもがくほど
攻勢の蜘蛛は周到な沈着を以て
遂に隙を得て虻の首もとに確りとかみついた
虻は苦痛の中に最後の努力を以て
倍し三倍して翅を鳴らすけれども
あゝ、力は容赦もない運命の決定者である
虻は力尽きた
恐ろしい沈黙が来た
も一度虻が奮ひ立った
けれども長くは続かない
永い永い沈黙が続いた
恐ろしい沈黙だ
恐ろしい不動だ
この沈黙の中に
今二つの命の真剣な取引が行はれてゐるのだ
献身の賭死の争闘があるのだ

三度根深い本能が
虻の翅をふる〜と痙攣的にふるはせる、止まる
更に同じことが繰り返される
けれども力は弱く弱く
段々に間遠く、遂に消える
ここに自然が
彼女の極めてありふれた小廻転を見せる
これを見て会心の笑を保ち得るものは強者
弱い人間は
互にどこまでも人工的でなければならないのか？
答へるな
（或は答へてみる
まことしやかな嘘も亦最も愉快なものの一つだ）
そんな必要が何処にあるか
これは勇ましい事実だ
道徳と倫理とが曾て一度この事実を妨げたことがあるか
あらゆる人工が曾て一度この事実に対峙したことがあったか
否、それらは或はより卑劣に事実をうすもののおかげに追ったかも知れない
けれども、それらは又或はそのようにして
より残酷にこの事実を粉飾し、煽動教唆したばかりだ
人工は整理の名をかざして関係を複雑〔複〕にした
人工は正義と愛とをかざして残酷の喜びを密かなる蔭に強調した
人工は、形式は、刺戟を倍し感動を變形し病的享樂を授受する為に作られたる
極めて憐憫なる自己陶醉である
それならば最も原始的なる、最も赤裸々なる自然こそは
反対にあり得べき唯一の最も簡單なる調和的事実でなくて何だ

十月の或る朝
露ばんだ庭の片隅に
漸く暖かい日差を浴びて
ふところ手して
華やかな花びらの舞台に
明るい勇ましい黙劇を見た

〔×を附す〕

終日一人家に居て、日向に埋まって居る。日向は人を馬鹿にする。其上気味の悪い感傷が自分を襲ふ。

新聞に中村彝³¹³氏の死が伝えられる。謹んで哀悼の意を捧げる。

二十六日

終日暗く曇って寒い。朝起きるとから、頭がびり〜痛い。夕方から海上ビルディングの中央亭にゆく。これは自分達の小学の時の先生、大江安之介先生の還暦をお祝ひする為に、自分達が小さな祝宴を張ったのである。集るもの、小山直彦、本多正震、佐々木六郎、安場（藤原）保国、三島通隆、中川久順、石渡六三郎、橋原良一郎、木越進³¹⁴、市野（北大路）信治、新井四郎³¹⁵、渡辺慶三、甘露寺方房、高橋茂雄、岡部長世³¹⁶。大江先生も随分年をとられたが、斯うして集まって見ると、われ〜の連中も已に社会に出てあまりに色んなものになって居る。

散会后、中川と帝国ホテルに行き、十二時過ぎて家に帰る。夕方から降り出した雨は止まず、田舎道は忽ち溝泥のようになってゐる。

二十七日

暗い日、暫らく雨。寒く道が悪いことを思つて外へ出ない。

二十八日 日曜日

どうやら天気になった。さて、歳末に当って一年をふり返ってみるかな。先づ今年は一月から十二月まで、何かにかぶつぶつ怒つて来た。一年中檻を感じて来た。檻と戦ひ檻を呪ひ、さてどうやら檻に負けて来たかに見える。一年中怒り続けて来た自分を、けなげに思ふ。けれども亦、腑甲斐ない、だらしのない自分をみじめに思ふ方が本当のようだ。何故なら、自分の怒りの対象は岸としてひるまないのだ。自分の怒りは対象に対して、何等の刺戟も反応も与へては居ないのだ。尚も怒りは続けられねばならない。

けれども亦、対象は応へさせられねば変転し、変形し、異動し、崩れ又再び建説^{〔設〕}させられねばならない。力が足りないのか、力の消費が足りないのか、力は養はれなければならない。力は惜しみなく消費せられねばならない。さて、反対にぶつかつて来い、試して来い、荒れ狂へ、幽霊よ、影よ、悪魔よ、檻よ、毘よ、復讐よ、矛盾よ、敵意よ、仮面よ！

三十一日

二十八日午後、久頭サンと銀座に出、望沙留荘に梅原龍三郎、安井曾太郎、牧野虎雄

の展覧会を見て、二時五十分の汽車で鎌倉に行く。同じ列車に母と佑サンとが〔乗カ〕降って居る。これは、〔柴山〕昌生叔父様の昇進〔317〕のお祝ひの為に（今度は年賀をしないので）集った〔ママ〕のだ。山には已に〔本田〕讓二叔父様が子供達をつれて来て居られる。遅く兄も来る。皆で宿る。二十九日、三十日と自分は鎌倉に宿って、今日夕方東京に帰って来る。怪しげに曇って居る。何と云っても雨をまぬがれまい。

大正十四年 正月

一日

雨は降らない。それ処か、午前は弱いながらも閑かな日がさして居る。家では珍らしく家内中といった処で、親子四人集って、極めて呑気な正月が明ける。ウイスキーとペパーミントとキュラソーで、朝から歌を和し、ヴァイオリンが奏かれ、来る人もなければ、ダラシにも構ふ必要がない。三時半に劇場に一寸行って帰ると、佑サンが羽織袴で来て居る。英子サンも後から来る。そして、晩飯を一緒に食べたけれども、佑サン達は早く、八時半には帰ってしまふ。

午後は、情けなく曇ったが、道に風もなくぬくぬくと暖かいので、街では何処も彼方も、着飾った街の娘達が羽根をつけて居る。築地の川岸のあたりで、電車の中からそんな光景を見て居ると、正月が好きになる。

二日

昨晩夜中にざんざんと降った雨が霽れて、ぬくぬくと暖かい。午後佑サンの処に呼ばれて、母と兄と三人で日暮前まで御馳走になる。佑サンの処を辞して、兄と新宿に出、マコトサンと一緒に、新宿、本郷、神田とまはって、十二時半一人家に帰る。

三日

晴天。昨日までの気まぐれな暖かさが去って、朝は鋭い霜柱がキリキリ光って居る。暖かい縁側に、榎本がしょんぼりしてやって来る。元旦の朝から上さんが気が違って、——気が違った程でなくとも、兎も角元日の朝、大晦の続きのまま、髪一つなでず、着物も着換へず、ふらっと家を出てしまった。午後二時に上さんは黙って帰ったが、黙って寝てしまった。上さんは、今も尚黙って寝て居る。食事も取らない。其故、榎本の年に一度の、二十年来の楽しみの成田様詣りも立ち消えた。上さんは、黙って寝て居るから、どんな風にして、何の為に、何処をどうして来たのかは分らない。尋常ではない。榎本〔ママ〕をお酒を飲んだが、珍らしく酔はないで帰った。

夕景から久躰サンと田辺サンに行く。恒例によって、近所の子供達——子供達とも云へない程に、この人々は年毎に大きく立派になって居た。一年の正月に一度逢ふこの人

人が集まった。笠サンの貞チャンと貞チャンの兄サン，八重子サン，静枝サンと秀雄サンと。それから千代三サンが来て居た。八時半までお酒を飲んで，自分も仲間になった。賑やかに，かるたが飛んだ。このかるたも，自分は年に一度斯うして田辺サンの処でとるのでから，手も足も出せない。只酒と二人で場を賑ははすのだ。一時前に家に帰って来る。

○障子引くや雀飛んであとに霜柱

四日 日曜日

午後三時に江波の処に行く。夕方まで御馳走になって居ると，宮田，原瀬，小松が三人で来る。夜は，江波の妹弟，皆とカルタをとったり，子供らしい遊びをしたりして，十二時過ぎ家に帰る。

五日

赤くにござった日は力なかったけれども，霜も置かず，土はほぐれて柔らかい。それなのに，自分は風もないそんな日向に居て，ぞん〜と寒いのだ。襟巻をして，火鉢を引いても寒い。で昼には愈々病気だと解る。熱は三十八度三分に上る。けれども，午後人が来る筈でもあり，懶くはあつても堪えられな程【い脱カ】にもないから，起きて居る。夕方前になって，文ちゃんが来，原瀬が来，夜になって，江波が来る。十一時まで相手をしたが，遣に辛かった。けれども，体温は三十七度九分【い脱カ】に下って居る。

六日

紅茶だけ飲んで，奥で寝てしまふ。自分，一年に必ず冬のうちに一度か二度，この風邪にやられる。で自分はよく知って居る。熱は一日二日三十九度内外で，後下って居る。そして，これも一日二日は床に寝て居て，足腰から肩まで，関節がはなれ〜になるようにしたいのだ。自分は又，夜中に飛びおきるかも知れない。目には痛く泪が溜み，塩っぱいものが絶えず鼻の奥に湧いては咽に伝はる。自分は一日のうちに，何百回かつばきをはく。煙草は，全く味がなくなってしまう。それでも，随分量は少ないが，決して

止めない。

【欄外に記す】

[午前九時半 三九.〇 94

午後二時 三八.七 89

午後六時 三八.八 103]

七日

昼間から寝たり起きたりして居るのだから、夜中中、寝たり覚めたりして居るのだ。けれども、足腰の痛み、目の心の労れから、気根は極度に減退して、字一字読むでもない。三分目をあいて居れば、五分は目をねむって居るのだ。その間に怪しくはなれへな夢が、過ぎては来る。今朝から体温が下って来たので、目がいたまないだけでも気持ちいい。が食物は益々まづい。

午後田辺の英サンと国サンとが来たので、床から出てしまふ。そして相手をして居るうちに、夕景、兄が保チャンをつれて帰って来る。更に中井良サンが来る。英サン達が十時に帰ったのち、グズグズして、十一時半に熱をとってみる。七度もない。もう大丈夫だ。一時就寝。

〔欄外に記す〕
[午前六時 三七.八 77]

正午 三十七.八 74]

八日

熱はないようなので、床を上げてしまふ。保は、自分達が寝て居るうちに帰ってしまった。良サンは臆劫らしく、駄弁ったりヴァイオリンを奏いたりして、晩まで居た。茅ヶ崎から電報で、照子の危篤を知らせて来る。で早速見舞だけをやって置く。夜は比較的早く、十時には何もかも静かになった。だがまだへ腰から肩へかけて痛みがぬけきらない。時々咳き入って胸が痛いほど苦しい。鼻が厚ぼったく、目のぐるりがだるい。今日は、岡本の命日だったが、そんな訳で、原宿へも行かない。

九日

昨夜、夜中に再び電報で、朝、照子が死亡した旨を知らせて来る。で兄が午後、茅ヶ崎へ行く。朝から段々にしぐれて寒く、夕刻には雪でも催しそうになって居たが、どうやらもって居る。今日こそ終日家に居て、来るものもなかったのに、少しでも落ち着いたとは思はない。僅に本でも読まうとするが、目が痛んで堪えない。明日は茅ヶ崎に行かねばならない。七時には床に入ってしまう。

十四日

朝、鏡を見たら、髻がもちゃへ生へて居る。きたならしい。十日に家を出たきりなのだから、無理もない。十日の朝、目がさめると、隙間風がひろへと寒い。雪のようだと思ふ。けれども、曇って暗いし、頭を上げて見る元気もない。眠る気もないのだが、いつまでも床の中で目をつぶって居る。九時前になって、勢一杯の元気で起き上ると、雪だ。一二寸もつもって、まだどんへ降って居る。自分は、茅ヶ崎に行かねばならないから、情けない気もする。けれども亦、飽きはたてた心が何処かでロマンチズムに懐

れる。うんと降り、うんと降るのだ。で雪の田舎道を、粗末な棺を送って行くみすばらしい行列を、自分は見て居る。けれども、雪は降っても降っても、此の上積りさうにない。十一時には、木々の雪がかたまつたまゝ、地にずり落ちて、ぼたんへ〜と水っぽい音をたてる。段々遅くなって、十二時前にやっと外套にくるまって家を出ると、雪は漸く斑になる。其のかほりに北風がはげしくなつて、鼻の先がちぎれさうだ。自分は雪よりも風をよける為に、洋傘を横にさして歩く。道はまだそれほど悪くないが、店屋の庇から摺落ちる雪の塊が水たまりになつた路面に、ぼちゃんへ〜泥水をはねかす。一時三十分の汽車で自分は茅ヶ崎に向ふ。汽車はすいて居る。汽車の中は、スチームの温りが籠つて、ムーム〜と暑い。大船を過ぎると、雪は更にない。薄陽が照つたりかげつたりする。茅ヶ崎には、全く雪の片影もない。砂道は水をひいてぬからない。丁度式に間に合ふよゝうに行きつた。^{〔狭〕} 狭苦しい処に、それでも誰彼と十何人の人々が窮窟^{〔窟〕}に座つた。そして、日暮前に八台の田舎車が露はな棺を送つて、焼場についた。古い松並木の東海道に日暮の風がざわ〜となり、自分達は小さな桑畑を一寸登つて、小高い砂山の上に、ホツタテ小屋の焼場に、赤い入日が横からさして居るのを見た。も一度一人の^{〔神〕}官主が寒さうな声でのりとを上げた。寒い砂山の上で、自分達は外套を着たまゝ、アセチリンの火から、針のように細い線香に火をうつした。女達を帰して、久武³¹⁸⁾と自分だけ後にのこつた。松薪の上に棺が置かれ、塗丹板で僅かに上を被はれた。石油が無造作にかけられ、一枚の新聞紙から火がうつされた。火は、悠ち石油を伝つて広がつた。見る〜うちに、薄い棺がめらめらと燃えはじめた。日がとつぷりと落ちた。自分は此の焼場番を六年前に見た。今、自分達の前に居る焼場番人は、六年前と少しもかはつて居なかつた。思ひなしか、着物まで同じもののように思へた。小さな貧相な顔は、ゴツ〜と骨ばつて、煤けて居た。砂利禿の頭が短く寒さうに顛えて居た。六年前には、此のホツタテ小屋も三方板で囲まれ、兎も角も煉瓦で爐が出来て居た。だから、自分は父の棺が燃えるのを見なかつた。そして、震災の名残がこんな処にあるのだ。今小屋は辛じてひんまがつた屋根を背負つて居ただけだ。そして、棺は殆ど野天の下で、露はなままに焼かれるのだ。自分達は、棺に火がうつるのを見て車に乗つた。自分は、停車場から藤沢に出て、電車で鎌倉に行った。十一日の午に、自分は茅ヶ崎についた。御墓所に行つて、照子の御骨を待たつた。天気は朗らかに晴れ渡つて、田圃の中の新道には、往く人来る人がたえなかつた。随分と待たつた。風が出て来た。烈しくなつた。冷たい風だつた。お骨が来てからも、^{〔神〕}官主が永いこと自分達を待たせた。

お骨が埋められて久しくして、^{〔神〕}官主が来た。形ばかり供物が上げられた。荒々しい風の中で、簡単に式が上げられた。お末様は、極度の悲愴の為に、持病の心臓を痛めて床について居る。

自分は日暮れて鎌倉にかへつた。十二日は、閑かだつた。橋口に手紙をもたせて、湯地を呼んだ。午後三時に湯地が来た。久々に湯地と酒を汲んで、一人で酔つた。九時半

に湯地は酔はないで帰った。十三日、日暮前に自分は東京に帰った。久顕は、風邪を引いてねて居た。英子の処では、朝、男の子³¹⁹⁾が生れて居た。遅く夕食にありついた。晩には、佑サンが出て来た。落着かないで、早く十時に床につく。

東京に帰ってくると、空っ風が冷たく、雪が凍ったまま残って居る——

自分は幾つかの用が、自分の前に立塞がって居るのを感じたのだ。そして、鎌倉から帰って来た一つの莫然たる理由がそれだったのだ。処がさて帰ってみると、なる程用が方々にたまって居るようだ。だが、どれもこれもくだらない用ばかりなのに落膽した。其上、も一度考へて見ると、くだらない故に無いのと決して同じではないのだ。勿論、いつまでに何々だけをしなければならぬのではない。而も亦そのうちには片づけなければならないのだ。而も自分はそれらを片づけて落着きたかったのだ。東京に帰ったら、その朝、英子サンが二人目の男の子を産んで居た。久顕サンが高熱で寝て居た。家の中がぞわ〜して居た。それだけだ。

そして、今日が十四日だ。空っ風が吹きつづける。だから自分は一步も家を出ない。

夜になって、昨夕、新井の古本屋で買って来た、シェイクスピアのジュリアス・シーザーを読んだ。自分はシェイクスピアのものを殆ど何も知らない。^[四]森欧外氏の訳したマクベスを読んだだけだ。その外には、余程以前に帝劇で勸弥のやったハムレットを見たことがあるが、何にも覚えては居ない。処で、マクベスは、五年前（満四年前）には、かなり面白く読んだように覚えて居る。今シーザーを読むと、まるでつまらない。一体当時のプラット・フォーム式の演出では、台詞が、否台詞そのもの（或は意味よりもリズムが）、大きな問題かも知れない。だから日本の能に相当するような特異な抑揚のもとに、原語でやったなら、そして、其中に特異な伝統的技法乃至約束が観賞されるならば、又特異な味がそこに渲むのかも知れない。（そしてそんな意味では此の明治四十年代に出された訳文は、なか〜綿密な注意が用意されて居るらしい。——戸沢始射といふ人の訳だ）けれども、内容乃至意味に至っては、更に近代的何等の刺戟感興もないものだ。英雄は極めて単簡なものであり、スケイルも案外大きくない。場面のとり方なども説明を遠く出ない。これならば、小説にして、もっと形容でもたっぷりにした方がました。或は講釈師にでも喋らせるか。叙情味もなければ、ユーモアもなければ、驚畏もなければ、鋭さもない。或は、これは殊にプラタークに全然忠実なものださうだから（つまらない事だ）、シェイクスピアが事実をいかばかり過ぎたのだらう。兎も角、現代的には何等の問題でないばかりか、興味から云ってもマクベスに遙かに及ばない。とまれ前にも云ふ如く、これは恐らく現代の劇が意味する劇ではないのだ。恐らくは、原語の語詞の駆使乃至韻律にこそ最大の価値があるらしい。

だが明治四十年に此の訳があり、大正二年乃ち六年の後に^[四]欧外のマクベスがああした訳詞を持って居ることは、驚くべきことだ。今自分の所に、明治時代に出版になった書がほんの二三ある（震火で焼かなかつたにした処で、自分が本らしい本を読むように一

—それも僅かばかりだが—なったのが、大正六年に中学を卒へてから、二三年の間なのであるから、明治の書はどうせ数へる程しかなかったのだが)、明治三十年初版及四十五年初版の一葉全集が各一卷と四十年に出て居る高橋五郎のシャクンタラの訳がある。処で今は一葉全集の方は問題でない。同じ四十年にシャクンタラがあり、此のシーザーがあるのだ。前者は散文的韻文であり、後者は準古語で訳されて居る。たったこれだけで、変な結論に思ひあたるのは勿論早計であるが、何だか自分には此の辺の五七年に日本の文芸物が文語から口語へ、準古語から現代語への著しい転機をもったもののように思はれるのだ。

で一番古めかしい本を出して試に出版年代を見るに、四十二年には千葉掬香のイブセン〔ママ〕の現代語訳が三四あり、四十五年には島村抱月のズーダーコンのマグダの訳がある。そして、茲にけなげな一本がある。四十二年の末に印刷されたもので、青山霞村といふ人の「草山の詩」といふ詩歌集だ。是こそは、現代文の生みの苦しみを悩む、実に歴史的産物だ。面倒臭いから一々書かないが、これこそは、けなげな過渡期の一階段を示すものでなければならない。緒言に見るに、「私は十年来、口語詩の作法を研究して居って、三十九年に口語の短歌のみを版に」したとある。斯うして出来たのが、此の書であると思ふと、実に滑稽にも悲痛である。

十五日

朝から晩までの間に、忠坊が何度となくやって来る。そしては自分の頭の中を、又落着き度い一日を、出鱈目に引掻きちらしてしまふ。自分は終日家に居て、何もしない。午後、梅子叔母様が出て来られる。

十六日

暗くしぐれて、寒くて寒くて、一日コタツに入って何もしない。背中がぞん／＼寒い。頭がわれるように重い。

十七日

朝から家を出る。神田に出て、東京堂で本を買って、動坂に出て、松平に金を払って、渡辺町に建畠大夢氏を訪ねる。アトリエに偶然服部〔七三郎〕仁郎、倉沢量世、足立貫一、山本稚彦が来て居た。朝から歩きまはって、途方もない寒い荒い風にあたって、下腹がキリキリ痛かったが、ここでストーヴで存分に暖まって、いい気持になる。倉沢と江波を尋ね、夕食まで御馳走になって、倉沢と別れて田辺サンの処にゆく。十時過ぎて帰ると、文ちゃんが出来て居る。相変らず遅くまで起きて居るから、先に床に入る。

十八日 日曜

まだ真暗なうちに文ちゃんの話声を聞いたが、再び寝ついた間に、文ちゃんは帰ってしまった。昼前に家を出、三越に用をすませて、和田英作³²⁰氏の家を麻布に訪ねたが、留守なので、田辺サンに一寸まはって、三時に家に帰って来る。

トルレルの「機械破壊者」を読む。すばらしいものだ。相変わらず悲観的ではあるが、潤ひのある作だ。品を落さない程度の、又不真面目にならない程度のユーモアが又、人を退屈させないように、否もっと高い意味にまで働いて居る。作風は、全体を通じて「ドイツェ・ヒンケマン」と全く似通って居る。トルラーのものに就いては、もっともっと読み度い。其の上で更にもっとよく読んだ上で、もっとはっきりした賞讃が送り度い。

十九日

漸く少し落ち着いた気持で日向に座ると、鎌倉から電報が来る。其故自分は軽い昼食の後、家を出る。そして、一時から三時まで、青山の墓地に立って居る。其の間、寒い風が吹き、乾いた埃が流れた。其の間に自分は二三言独語か、或はそれに似たような口をきいた。四時には、自分は神田に居た。東京堂に行った。これは、一昨日買った本の頁がぬけて居た為に、取かへて貰ふ為だ。そして、取りかへて貰った。四時半に自分は築地に居た。だが築地では、昨夜自分にあてて葉書をくれた筈だった。だから、芝居はのぞいただけで、見はしなかった。それにしても、家に帰ったのは、結局十時過ぎである。それから、——何にもしない。

二十日

終日家に居ることを宣言して、朝風呂に入って閑かになって、風のない日向に出て、ママゴトの様な本を読んで昼食を食って休んで居ると、三沢が来た。

夜がいやにひっそりして、いやに寒い。

私はいつもここにこうして居るのだが……

私の小さな部屋は

秋からちっとも変って居ない

只或日

冬らしい風が吹いた日に

一つの円火鉢が運ばれ

今、毎日此の中に赤い火があつて

私の小さな部屋を僅かに暖めてゐる

だが私はいつも用心深く
大きな鉄瓶をそこにかけて置く
だが又
ともすれば此の鉄瓶も私をへこませないので
そんな時私は
円火鉢一ぱいの金盥を以てそれにかへる
さて私は諦めて
机に向って本をひらき
冷たい手でペンを握り
又油土をちぎって彫像を刻むのだが——
円火鉢の温もった縁に置いた
ほんの足先からの
小さな安心に私は満足するのだが——
又時たまにふりかへって
(湯気は優しく有難い)
鉄瓶から白々と立つ湯気に
ようやく心慰むのだが——

だが又冬は
しばしばそれにもまして寒く冷たく味気ない
私は鉄瓶をおろし、金盥を片寄せ
低い椅子に
海老のようにまるくなって
赤い火近く手をかざして
いつの間にかうなじをたれて
そっとまぶたを合はせる心やすさ……

私は新しい本から本への
頁の数に未来をかけ、成長を夢み
ペンずれの音のさらさらにつつを越え
懐かしい彫像の誕生に忘我を嘗める
それもいい
だがこれもいい
どっちに理由があったのか？
(本能的欲求と^{理性的の}か^{った}意志と——)

とまれ私は
 冬夜の寒気にこもる汽車の汽笛
 又続く遠い震響か何かに
 重くけだるい瞳を開き
 僅にこうべを擡げるのだが――

そんな時私は
 私自身の^{〔素〕}粗朴な正直を
 悲しく可愛くほほゑむのです

〔×を附す〕

〔欄外に記す〕
 [(卑屈な落伍者の歌)]

私は詩人達が声をあはせて
 元気そうにうたふのを聞きました
 (冬を見よ
 この真冬を注意深く視よ
 何といふ沈黙の中に
 何といふ不動の中に
 おゝ、うごめくものを感じないか
 おゝ、はりつめた力を感じないか
 この沈黙と不動の中にこそ
 勝利への、完成への勢が見える
 関声の、凱歌の調べはととのった
 この冷たい真冬の中にこそ
 既に春は芽ぐみ
 春の夢は暖かく香って居るのだ……
 おゝ、しぶとい力の自然よ
 厳かな、偉大なる意志の自然よ)
 とんでもない!
 自然があまりにも親切なる故に
 自然があまりにもしちっかたい故に
 君達はそんな風にづにのる権利でもあると思ふのかい
 おゝ、寒い
 君達は只

自然が冬の次には間違ひもなく春を送るだらうことを知って居るだけで
早まっては、かいかぶってはいけませんよ
(あゝ、気まぐれな運命がよくやる奴なのだが)
あゝ、自然がほんの少しばかり茶気があって
冬の次にも一度冬を持って来てくれたら！
其の時君達は怒ることすら出来ないで
驚いて泣くだらう
怖れて倒れるだろう
だが其の時僕は只
率直にふるへつづけるだけでしようよ

(おゝ、寒い)

いやこれは失礼—— おゝ寒い

□□□□□□□□□□□□□□□□

たんと火でもおこしてあたりましよう

□□□□□□□□□□□□□□□□

[×を附す]

二十一日

晩、築地にゆく。イプセンの「幽霊³²¹⁾」三幕。今日は始めから終ひまで見る。
〔吉田謙吉〕
謙チャンの舞台もなかなかいい。演出もいい。すばらしくいとさへ云へるかも知れない。

小野宮吉のマンデルスに、土方の演出らしさが見える。東屋³²²⁾の指物師は台詞のき
っかけのうまさで、山本安英³²³⁾のヘレエネはなかへおちついて来た。巧みでさへある。
が只、台詞に臭みが出て来たのではないか？ 田村³²⁴⁾のレジネが惜しいことに、叫び
過ぎ。友田のオスワルドは、同じ人の三年程前に若者座でやった同じ役のおぼろげな印
象から見ると、勿論非常にうまくなったとは云へるかも知れないが、別段変わったとは思
へない。其上自分は友田の独特の間がどうもすかない。

帰ったら久武が来て居た。

二十二日

昼過ぎに久武は帰った。自分は三時に家を出て、目黒に遠山五郎氏を訪ねる。夕食を
御馳走になって、十一時前、小城サンに行つて宿る。

二十三日

昼に保チャンと一緒に、信濃町で別れて、自分は慶応病院に通子を訪ねる。それで
も一時間も居て、三時に家に帰る。

二十四日

一時、祖父の一年祭なので、青山に墓前祭を行ふ。後、華族会館にて晚餐。

二十五日 日曜

朝早く、和田英作氏を訪ね、午前に帰宅。佑サンの所に晚餐に呼ばれる。

二十六日

何時の頃からか、何時の間にか、私は大変に利口になって了ったようで……へっへっ。何故か、又誰の為に、何の為に、誰に憚かって、俺は一切の感情、好悪憎愛をかくしてするようになったのか。若しそれならば、何の為に。殊に何んな理由で、こんな只、毎日の行動を書き留めて置くのか。

一時はあらゆる憎悪をここに吐き出し、あらゆる不平をここにならし、受けきれぬ悦びをここに積んで、俺は心軽かった筈だ。

それなのに今日此の頃、否いつの頃からか、全く俺は人様の前に恐縮でもして居るかのように、恐るへ上っ面の出来事とくだらない事実とを申上げて居るといふ恰好だ。ぶつへ云ふことがないのか。否、それ故に俺は毎日ぶつへ云って、毎日めそへして、顛へたり、叫んだりして居る！馬鹿な馬鹿な骨頂だ、しっかりしろ。

朝から冷たい水仕事。石膏取りといふ駄々仕事だ。矢鱈と時間ばかり食ひやがる。自分のものは、金をかけても石膏屋にやらせながら、人の為に冬の真最中に此のぞまだ。仕事はまだへ終らない。明日一日はかかるだらう。これは、俺が人の前でいい顔をした罰だ。人の前でにこにこ笑った罰だ。考へて見ろ。俺は一月中そんな為に、自分の仕事は何一つ出来ない程に忙がしく着着かなかったのだ。みんな罰だ。

それから昼から出かける。望紗瑠荘に（現代大家彫塑小品展覧会）を見る。なる程。現代大家十五氏の一人一点。だからかなり期待して居たのだが——それに現代大家の小品をあまり見たことがないので——けれども、何のことだ。こんな風にとりすまされては！国方林三氏の「憩ひ」がいい。

情けない気がして、動坂に走って石膏を買って帰る。

先達から読めないで読めないで読みつゞけて居た、シェイクスピアのハムレットを漸く読み終へる。訳は先日のシーザーのと同じ、戸沢姑射。兎も角もくだらない用事の間合へにぼつへ読んだ為に、まとまった印象がひどく妨げられる。兎も角も、すべてがまどろっこしい気がする。無駄口をきく、急の場合に悠長である。例へば倫理道徳的な観念すらが、殆どグロテスクだ。そして、筋。こいつがまたくだへしくまどろっこい。例へば、田舎源氏でも読んで居るようだ。これが或る意味で興味を引き得るとしても、その為に用ゐられたくだらない場面は、頗る非現代的だ。あんまり親切で、あんまり間が延びて居る。即ち、残された興味は、只に十七世紀初頭に於ける倫理道徳観念及びハ

ムレットをして云はしめて居る、シェイクスピア自身の演劇論等々の考古学的乃至骨董的価値にかかる。

二十七日

終日家に居て、面白くもない石膏取り。

二十八日

根よくもシェイクスピアを読みつづける。今度は「から騒ぎ」(マッチ・アドゥー・アバウト・ナッシング)。訳は同じく明治四十年、戸沢姑射。同じ簡単さと、同じ無駄と、田舎源氏趣味と非近代味と、同じグロテスクネスと同じ悠長さと、閑けさと骨董の興味とを持つ。

兎まれ、これは^{〔判〕}倒底近代戯曲ではない。能狂言である。英語で読むことが出来たなら！其上悠長さと上品さとは、何処かに密接な関連を持つらしい。猶主理的解剖的悲喜哀楽好憎の過程、現出、認受、処理に至っては、興味不尽の感がある。又それらの表現に対しては、正に驚畏に価する。此の意味に於て、更に原語にて読み得るならば！部分的に熟読愛誦を惜しむべからざるものがある。

午後、所用で築地の劇場に行く。

二十九日

朝から終日しぐれて寒い。けれども、自分は久しぶりに落ち着いて居る。朝から終日自分の室にとちこもって落ち着いて居る。何をしたいふのではない。けれどもこんな日にこそ、こんなにして居る時にこそ、自分は育ちもし、又生まるべきものに対して親切でもあり得る。

日暮前になって、北村喜八の「表現主義の戯曲」を読む。1・2に於ける表現主義の解説及び批判は、少なからず常識的であり過ぎる。却って、3・4・5の一々の作品並に作品に就いての^{〔紹〕}照介は、手がかりのない自分のようなものにとって有難い。けれども、ならば、之等の全訳がどん／＼出てほしい。その方が自分のようなものにとっては自由であり、気楽でもある。それから、表現主義の技巧乃至形式に就いて、著者は一重に表現主義的精神乃至奥の奥なる象徴、心霊、形而上学的なるものの必然的要求からのみ説明して居るが、これはほんの少しばかり、いかばかり過ぎては居まいか。自分は今少しフリーな考へ方をして居る。即ちこの一面は、否、半面は専ら「刺戟」に負う処があるのではないか。即ち表現主義の精神的発展と共に、芸術的な形式技巧の発展に、自分は表現主義の仕事の半面を見る。即ち之故に表現主義芸術は、困憊の独逸でなくとも、燥急な煩鎖^{〔煩〕}な二十世紀には認められるのだ。自分の云ふのは、「刺戟」の依って起るところの因原でなくて、「刺戟」そのものの強さだ。これこそは、半面ではあるが、立派な半

面であり得る。

三十日

こごえつく寒い冷たい冬の間の唯一の慰め、雪！それは、僕は少しは酔って居るさ。だが、この通り、たいして酔っては居ないさ。わけはこうだ。朝起きると、雪が降って居る。寒い。細かい、勢のいい雪だ。有望。で其の通り——明方前から降り出したものと見えて、まだほんの一寸程しか積んでは居なかったのだが——終日降って降って、日暮前には七寸は積んだろう。自分〔僕〕は、寒く落着いた昼間の後に、四時に家を出る。灰色の雪を礼讃する為に。一つの慰めを感謝を以て受ける為に。先づ僕は家を出て灰色の雪を踏んで、又浴びて少しばかり歩くと直ぐに、喫茶店に入る。この喫茶店は最近コーヒーを飲むようになった処で、今日で三度目だ。これは先づ始めをはっきりする為だ。で僕はここで、先づ熱いウイスキーを飲込む。

「奥サン、帰りにも一度来ますよ」。これは終りをはっきりさせる為だ。そこで僕は、電車で新宿に出て行く。そして、場末のバーに入る。そこで、僕は又黙ってウイスキーを飲んだ。それは、大変な空気にとりまかれてだ。灰色の雪の夕、場末で幅をきかせて居るのはお職人サンだ。そして、お職人さんのお酒盛といふものは、すばらしいものだ。熊のようでもあり、七面鳥かほろ——鳥のようでもあり、馬鹿のようでもあり、癡癡病みのようでもある。喇叭のように勇ましく、見世物小屋のように騒々しく、豚小屋のようにいぎたなく、銭湯の湯気のように朦朧、又野良犬のように悲しい。

「え？お帰りになるのですか。え？もうお帰りになるのですか。」女給の悔やましい、いぶかしげな瞳を後に、僕は黙って金を置いて黙って外に出た。もう、すっかり夜になって居た。雪はひとしほ烈しくなっている。僕はオーバーのポケットに両手を突込んで俯いて、どん——歩いたが——雪は帽子からオーバーへ横ざまに積んで、僕は忽ち雪人形のようになった。だが又、雪は湿り気もなく、さら——とこぼっては積み、僕はどっちかと云へば、寒いよりは暖かかった。追分から塩町の方に僕は歩いてゆく。傘を傾けて小走りに走る人群に、雪は冷たいが、酔ひどれの独語は暖かく、人間味に溢れて愉快である。店並の灯は明るく、ゴム長靴の小供達は店先に炭で雪を釣って居る。僕はどん——歩く。道ばたに雪だるまは何処にでも、いくつでもある。僕は其の間にも、次のバーかカフェーを賤しくあさって居る。だが無い。少なくとも、僕は入らなかった。そして、諦らめて電車に乗ると、真直に銀座まで出てしまふ。銀座まで出ると、雪はぱったり止んで了った。下町の道は水っぽく、ぼちゃ——ぬかるんで居た。僕は直ぐにカフェーに飛びこんだ。駄々広くガラソとしたカフェーの、それでもストーヴの囲りに、四人のお客が二組にわかれて座って居た。僕は隅っこの卓に一人はなれて座り、豆を噛みながら、酒を飲みながら、静かな二組のお客を見た。一組の二人は卒業前の学生か、なりたての会社員だった。二人はもう、飲みも食ひもしなかった。二人は何にもない卓に深く寄り

合って、虚偽について若々しい議論を取引して居る。けれども又二人の結論は、言はば一つの円周の上を限りなく追ひ合つて居るようだった。問題から結論に到着すると、それはいつかはじめの問題になって居た。それ故二人は又、根よくも結論に向つて歩き出した。今一組の二人は、出来上つた社会人だった。一人は背丈が高く、鼻が高く、顔は青かつた。一人は下ぶとりに肥つて、品の高い大名顔を、金時のように赤くして居た。二人は上品で、物静かで——二人は静かな友情を互の酒杯につぎ合ひ、勧め合ひ、受け合つて、何時止むともなかつた。僕は、カフェーを出ると引かへして、日比谷の先まで歩いた。だが僕は、別に堀端の柳が、又石垣の上の古い松の木が、何んな雪景色を作つて居るかを見はしなかつた。僕は、酔漢が何んな風に交番の前で巡査といさかつて居るかを見はしなかつた。それならば、何があつたか。誘惑が、誘惑があつた。只それだけだ。それから僕は、来かかつた円太郎自動車³²⁵)に飛びのつた。だが僕は、背中をまるくして、立つて居なければならなかつた。自動車が止る度に、又動く度に、人の実がグツと浪うつた。ここでは赤襟嬢が紫色の顔して黄色声で、けれども元氣よく狭苦しい中で叫び又よろけて居た。

僕は電車に乗つて帰つて来た。駅から真白に氷つた人通のない道をすたへ急いで歩いた。踏切を越えて、だらへ下ろうとする所で、僕は雪に喰はれた。はづみを食つてひどく仆れた。起き上つたが、眼鏡が何処かに飛んでしまった。——だから僕は、最初の喫茶店に再び行つたが、僕はすぐ一間とははなれない奥サンと声でだけ話した。声でだけ笑い合つた。表情はおろか、顔の輪郭さへ朧ろげだった。「それは、こんな夜、こんな雪の中のことですから、きっと見つかると思ひません。けれどもあなた、それだけすれば気がすみますものね」。奥さんは、猶つけ加へた。「あなた、御一緒に行つて下さるか、それとも、私が……」。だが、娘はさつさとまんとを被つて手燭をもつて出て来た。だから僕は娘と二人で現場へ引かへした。娘は蠟燭に火をともした。僕も申訳にも見えない目を睜つた。二人は黙つて灰色の雪の上に灯を照らした。けれども、眼鏡は勿論見えなかつた。と人が一人踏切を越した。それこそ黙つて——だがその人は、僕達の前までくると、いきなり雪に喰はれた。氷つた雪の上に、その人は行儀よくどつと音立てて尻餅をついた。娘は笑はなかつた。僕も笑はなかつた。当人は黙つて起き上ると、黙つて歩いて行つた。「僕はもっとあばれてひどい目に仆れたんです。」娘がくすへと笑つた。

三十一日

遠山五郎氏から光風会の展覧会に招待されて居たので、昼前に上野にゆく。

午後、築地へ行く。

二月

一日 日曜日

昼頃、梅子叔母様が、英子サンの処の女中をつれて来て下さる。

夜、兄が文ちゃんをつれて来る。

二日

三日

四日

退屈なる！第何日。自分は何もしない日の幸福に就いてしばへ〜経験し、しばへ〜語った。そこで自分はここに、退屈の定義を与へて置かねばならない。退屈とは、自己に逆行する、或は何ともない、時間的にけじめのない、ほんの少しばかりの、又は沢山の^する^こと^を持^つこ^とである。そこで次に、退屈の恐しさに就いて告げなければならない。退屈は、自分の鈍感と無意志に、すばらしい惰性を附与し、圧迫し、牽制し、引張りまはす。この通りだ。自分は夜、築地小劇場にゆく。チェホフの「桜の園³²⁶」だ。だが自分は完全に此の四幕を見ただけだ。といふのは、芝居を観るといふことは、耳と目で観、更に或るものは頭で観、感覚で観なければならない。それなのに、自分は今夜は目でだけ見て来たのだ。第一幕は不思議だった。第二幕は美しかった。第三幕は華やかだった。第四幕は、第一幕と同じように、奇妙だった。全体は暗かった。暗い中に故意にか、偶然にか、濃淡百の色がちかへ〜して居た。正しくか、間違つてか、兎も角も、その色が、その綾が、自分に明日を勇気づけてくれたようだ。物が見えて来ると、涙が暖かくなって来る。更に解つてくると、いやになって来る。先づ目が熱くなり、それからいやけがきて、歪んだ笑ひが来て——この間にひねくれたものが来て、偉がりが出て、憤慨屋が出て、稀に怖がりが出て——虚無の上に「熊」が踊つたり、「犬」が吠えたりする。更に物が感じられて来ると、悲しみが来る——その目は冷たく、泪は寒い——同情が薄く、幻の救ひ——救ひたい願が来る。

さて、最後に子供達の為に、自らは決して信じない慰め——空虚なる未知の中に光明の暗示をそっと置く。これは手品であり、同時に実（果）であるかもしれないから、決して忘れない。そのように年をとると親切になる。親切に甘へられる人々は幸者である。自分はひねくれもので、偉がり、憤慨屋、怖がりだから、極めてすなほに手品を見、同時に実であるかも知れないものを見ただけだ。即ち作者と自分との二つの寂しみを何とも思はないで、目で見て来た。

六日

昨夜から降り出した雨が、終日止まない。細かい、あるかないかの雨ではあるが、先

日から凍りついて解けようともしない雪が急に解けたから、外は大変だらうと思はれる。急に雨めきた気もするけれども、又鬱陶しい。夕方前、中井さんが来て宿る。

七日

午後、雨も止んだので、三越の朱葉会をのぞいて来る。夕景に帰ると、皿井の隼之介、陽の介³²⁷⁾が来て居る。

八日 日曜

天気は気持よく晴れて、急に春めいたが、だんへんに風が出て、夜にはひどい風になる。隼之介、陽之介は、今日も宿る。終日相手をして居る間に、忠坊^[中沢忠久]が遊びに来る。昼間、江波が来て呉れて、直きに帰る。晩には、榎本が酔っぱらって来る。自分は精も根もない、がっかり倦き、疲れて了ふ。

九日

少しばかり落着いて来るらしいが、例によって「退屈の惰性」が自分に憑いてまはる。其故自分は午後、江波の所へ出かけて来る。重い思ひをして廻転機も持って来たし、近々のうちに思ふ様仕事にかかれるだらう。

十日

夜半から降ったらしい雨が朝止んだ。それから生温い日がたけて風が出た。風は時と一緒に強くなった。午後から、夕から、更に夜にかけて、何とも云へない声で、泣き怒るもののように猛り立てた。自分は四日程前から、或る未知の人から託されて、何か近世の歌に関する論文を書く材料を探しはじめた。で曾て読んだ本を、又新しい本を幾つか調べて居る。

島木赤彦、半田良平の歌論。正岡子規。大隅元道。それから万葉集二十卷。短歌雑誌、アララギ。それに加茂真淵、田安宗武、本居宣長、香川景樹、橘曙覧、平賀元義、等々の歌のはしくれ。金槐集ののぞきみ。

そして今日、真淵について、殊に万葉集と対比しつつ少しばかり書くことにきめて、晩方から愈々取かかる。

十一日

晴天。風はまだ止みきらないが、春らしい。「真淵」は簡単に簡単にかたづけて、あらし出来て了った。午後あまり天気がいいので、久顕サンを引張り出して、足駄ばきで、ぐちゃへの、又こつこつの道を二時間足らずも散歩する。帰ったら、文ちゃんが来て居た。宿る。

十二日

「真淵」をまとめながら、原稿紙にうつしたら、二十枚になった。読みかへして見たら、まるで物足りない。書き度いこともまだあるが、書くことが目的ではないから、もうかかない。少しばかり勉強になっただけ得したようなものだ。正岡子規の歌を終日読む。夜、難波サン³²⁸⁾がひょっくり来て、十一時まではなしてゆく。

十三日

夕方から築地にゆく³²⁹⁾。横田³³⁰⁾が病気になったので、東屋が代って居る。で、東屋のロバヒン^[ママ]を見度かったのだが。偶然室町歌江も亦病気になったので、今日から伏見直江³³¹⁾が代ってやる。今日は、全体を見る気はなかった。だから、第一幕では、ガーエフばかり見て居た。第二幕では、ヅニャーシャばかり見て居た。第三幕では、踊りばかり見て居た。それからロバーヒンばかり見て居た。そして、三幕まで見て帰って来た。

十四日

「軍曹」の像を造り出した。が手こずった。まだ自分のものにはなりきって居なかった。

夕方三沢を尋ねたが、留守だったので、直ぐ家に帰って来る。

十五日 日曜

六時には飯を食って出かける。まだ太陽よりも有明の月の方が明るいと思はれる。電車は寒く長く、其上、田町の辺で四十分程も停車した。大森で降りて、こつこつ凍った道を馬込村まで歩いて、佐藤朝山³³²⁾氏のアトリエを尋ねる。九時になる。朝山氏のアトリエは、古い立木の中にあって、広くて寒い。が中は綺麗に片づいて居て、エジプトの首、メソポタミアの古彫、キリジャ前期のファサッドの首や浮肉など、又奈良の十二神将の首などの石膏が沢山にあり、古代彫刻のすばらしい写真版が何百枚とある。朝山氏の居処は、この室の一隅にある二尺程の高さの一畳敷の畳だ。寒がりの朝山氏は、直ぐに火鉢をかかへて、其の畳の上に上りこんで座った。自分もあぐらをかいた。朝山氏は、真面目な信念をぼつぼつと語った。自分は猶更ぼつへ受け答へた。事件は何もなかった。それなのに落着いて気が爽やかだった。十二時に朝山氏の朝飯と昼飯が出た。朝山氏と自分とは、三合か四合程の酒を、三時近くまでかかって飲んだ。朝山氏は、いい気持さうに良寛和尚の歌を詠った。ぼつりへ話して、四時に自分は辞して去る。

朝山氏へ

✓幾坂を越えて君が家静ければ鳥も巢くはむ蜘蛛も巢くはむ

✓どこの海のどこの浦わの海苔にかも君としをししそのうまき海苔

- ✓馬込に人二人居り君とわれしか思ほへて汲みしうま酒
- ✓友といへばかしこきものをしからずがにこころ和みて七ときを居し
- ✓馬込の村の奥道遠くとも忘らへなくにまたも問はむかも
- ✓春さらばいく坂越えて君が家あたりめぐらすさわ木見らく美しけむ^は

十六日

風が無くて日が明るくて、天気はすばらしくいい。

終日家に居て、良寛の歌など読み、又久々に二三氏へ手紙など書く。夜になって原瀬がやってくる。十時過ぎて雨が降り出したので、宿ることにして、一時半頃まで話して居る。一時頃には雨が止んだらしい。外が静かである。

十九日

十七日の午後、原瀬と共に家を出、自分は鎌倉に行く。昨夜の雨は雪になり、朝はほんの少しではあるけれども、四方真白になって居たが、暖かいと見え、ぼたへ解けて積まず、雪は又々雨になった。十八日はやんで居たが、雲が重たげに、時たま情ない赤い日が差す位だった。午後、八幡通の方を歩いたが、興もない。そして今日は又々、昼頃から冷たい雨がぼつへ降って来た。一時三十八分の汽車で東京に帰って来た頃には雪がまじり、夕方一時は盛に雪が降った。

二十日

終日曇って風が吹いて寒い。午後江波を訪ね、四時半に江波と隣の研究所に井上氏を訪ねる。美校の試験前なので、ひどく込んで居るらしい。三月から行くことにして、一時間程も話して帰る。

江波と別れて築地にゆく。横田がケスネルをやる所だったのに、病気の為に狼を急にとりやめて、「瓦斯」(第一部)をやっている。第一にくだらないことには、此の前既に、ぎりぎりにカットされた第四幕の労働者の演説が、今又議会開催中であるといふ理由で、更に差取められたことだ。でつまり演説は、「労働者の妻」一人にされてしまっている。其の上、花柳の演説は、前の田村のように無我^[我武者羅カ]シヤラにゆかなかった。今一人后東光の演説も、此の前よりよかったとは云へない。舞台装置も、配光も、演出も、追に此の前よりいい。最後の一幕を見なかったが、第一幕、第二幕が殊によかった。最後の舞台は、此の前の焼棒杭よりもずっといい。青山杉作の富豪が一貫してすばらしく、強くよく演じて居る。それに千田の技師。今度は五幕を通じて幕間を置かない。プロセニウムの中に、更にフレームをとって中央が正方形に残され、そこに舞台が変る。そしてその正方形の前方に黒幕を垂れて、幕毎に暗転でゆく。フレームは橙色の地に、吉田の謙チャンらしい半ダダイスチックな半デコラチヴな、雑多なもの形と模様とがちりばめら

れて居る。だが暗転といふ奴は、いつもながら不成功に終る。第一に音がする。それから客席が動揺する。これは時間が比較的永い為は無理がないとしても、次の舞台が開き劇が進行始めてから、無遠慮にどが〜と前の方の席にのさばり帰って来る連中がなかなかへらない。でこんなことを考へる。道具方の雑音をも恐れないような、グロテスクな刺戟の強い音楽？ そんな不思議な音楽がないだらうか。そんな音楽でつなぎ度いものだと。

二十一日

三沢寛へ。

寛公！ボンボンの寛公。ヤーイ、お母サンのお乳しゃぶりに……ヘッヘッヘッ。口惜しかったら保証人のハンコでも押して、理由書を出すがいい。まあ当分は行ってやらないから安神するがいい。但し、三月に入ったら、気がむいたら出かけるから、必ず鄭重にもてなすべし。展覧会は見ない。光風会だけ招待日に見た。丁度すばらしく雪が積んだ朝だったからではないが、モネの雪の絵はすばらしくいい絵だ。ここで序だから置いて置く。二延長も三延長も、其れ自身が目的ではない。色彩も亦それ自身が目的ではない。人体も亦。解剖学も亦。風景も亦。静物も亦。

其故僕は断言する。マチスはしば〜或は余りにしば〜、色彩を第一義的に取扱って居る。悪く云へば弄んで居る。即ちマチスは色彩至上主義的——勿論マチスはコンポジションに於ても亦、他の総ての要素的なものに於ても、異常な理知的才能を示して居る——最上クラスに居る。言はば第二義的芸術の極致だ。僕言ふ、第一義的芸術は如何なる意味に於てか、永遠なるもの——その姿は静かである。その言は無声である。それは絶対の象徴。その空気は重厚である。それは現世的感情を乗り越える。それは末梢的快感を持たない。それは生物的快活を持たない。それは外象的動性を持たない。それは動かない！——を持って居なければならない。其の意味で僕はマチスのものでは、傾向的には今年の「書を読む女」よりも、一昨年の「白衣の女」をとります。或は更にモディリアニの「女の顔」をとります。一言附します。一氏といふ人の議論には、今年の夏に於て、既に僕は殆ど逐一に反対しました。その内容は長くなりますから書きませんが、僕の日記帖に書いてありますから、機会を得て見て貰ひます。即ち君は、あの本によって僕の気持を充分にのみこめたなどと思ったら、非常な間違いです。

林君³³⁹の顔が出来たら見せて貰ひます。

毎日毎日天気が悪くていけません。では風邪を引かないように 久功

夕方築地に行くつもりで、久頭サンと家を出る。だがまあなんといふ馬鹿げたことだ。駅の時計は丁度一時間進んで居た。だから築地は止めて、神田に出る。久々で本屋をあ

さり歩くと、買ひ度い本がしこたまある。だが又何と高価なことだらう。手もない足もないのをひし〜と感じる。神田に居る時分から、霰がちらちら降り出した。中野に帰った頃には、道が白い程だった。

二十二日 日曜日

雪が降って居る。だがほんの二寸とは積んで居ない。昼まで止まず降って、三寸余も積んだらうか。昼食後、久顕サンと市川に青田サンの処にゆく。雪は止まない。けれども下町の方は三分一も積まないで、びしょ〜と解けて道が悪い。更に青田サンについた頃から、小粒な霧ような雨になって、少しばかりつんだ雪は、たら〜落ちてしまった。七時の汽車で帰る頃には、又雪になって居た。

二十三日

天気は晴れたが、風が寒くはげしい。だから終日家に居た。柿本人麿小集と源実朝小集（和歌）を読んだ。実頼〔朝カ〕の和歌の歌を読んで、先達人に書いてやった真淵論が、益々片手落ちであったことに気がつく。即ち真淵の万葉主義はさることながら、実際は寧ろ実頼〔朝カ〕から彼は彼の英雄主義乃至大様を引張り出して居るのである。金槐集が退屈に堪えなかった為に、よくも読まなかったのが失敗の因を成したのだ。

「軍曹」の像は、永いことかかったがやうやく出来上った。

二十四日

夕方小石川へ行ったが、〔生〕相憎御師匠サンの日だったので、早く帰って来る。

二十五日

曇って寒い。曇って寒い。だから自分は終日家に居て、火鉢にあたって居るより仕方がない。何んもしやしない。馬鹿気て居る。夜築地へ行く。

二十六日

曇って寒い。〔ママ〕かた〜と寒い。だから自分は終日家に居て、火鉢にあたって居るより仕方がない。何んもしやしない。馬鹿げて居る。

二十七日

照ったり曇ったりした。皆がてん〜に出てゆくから、自分は留守番をして居る。午後、原瀬が上の子をつれて来る。二人でマルタまで出たが、まだ道は川のようにだった。四時半に鎌倉から電報が来たので（鈴木繁様が亡くなったのだ）、六時半の汽車で鎌倉に行く。梅子叔母様が御通夜サレルので、留守番といふ格だ。鎌倉についたら、駅を出ると水溜

りが何処にでもあった。道がなまへしく滑った。ほんの少し前、^{〔雷〕}電鳴して雨が降ったのださうだ。子供達を寝かせて、女中に茶を入れさせて菓子をつまんで居ると、外は大変な風になった。明日こそ上天気だらうと思った。

二十八日

処が、朝起きると、なる程上天気だった。が、あたりは真白。積ったといふ程ではなくとも、一面に雪が降って、空気が乾いて風がつめたい。晩に、昨夜の自分の乗った汽車で叔母様が帰って来られた。例によって十一時過ぎで、話題もないのに話して居た。

三月

一日 日曜日

十時十四分の汽車で東京に帰って来る。留守中に三沢が尋ねてくれた。

二日

今日から本郷の研究所³³⁴⁾にゆく。研究所はひどく込合って居て、身動きも出来ない。けれど誰一人知って居る人が居ないから、誠に気楽である。所が、今日は何うした日か、朝から矢鱈と人に会ふ。先づ朝っぱらから研究所への途中、宮森に逢ふ。昼に研究所を終へて江波を尋ね、引張り出して、画廊九段に中村彝氏の遺作展覧会にゆく。途中、高野武郎に逢ふ。画廊前で遠山五郎氏に逢ふ。会場では、日高第五郎に逢ふ。遠山氏の処に居た小林クンが来て居る。三沢が来る。——こんな所で逢ふのだ！——小笠原貞弘氏が来る。江波と別れ、三沢を引張って家に帰る。道が悪い。風が寒い。

三日

研究所では、昨日から始めたばかりなのに、モデルが来ない。風は寒く、烈しいが、日は春らしく明るいので元気が出る。

四日

研究所では、忽ちモデルが変わった。今度のは前のように、もどへしないでもいい。研究所の帰りに、仏蘭西美術展覧会に行く。今度のは比較的小規模で、彫刻が一点もないのは物足りないが、ベラボーに沢山でなく、人もあまり込みあはないで、静かなので見安い。が又、すばらしくいと云ふのも極めて少ない。先づ名前を見ない先から、ぐんと自分を引つけたのは、番外室にあったロートレークの石版画である。これはすばらしいものだ。それからヴァン・ドンゲンの「十字路」が小憎らしい程しゃれて居る。同人の他の一点「肖像」が展覧を禁じられて、絵葉書だけ出て居るのは好奇心をそそる。そ

れから、ピッシェールの「安楽椅子の裸婦」及アントラルの「入江」が共にしゃれて居る。それから、マルヴァル夫人の二点「菊」と「裸女」の二点が目につく。この人ののは、毎々来て居るのに、今迄あまり気にとめなかったが、一昨年来た「花園の女達」の、淡いけれども特殊な世界はよく覚えて居る。今度の二点もそれへにいい。それから変わったのでは、ゴエルグの三点、クロチーの三点があるが、自分にはゴエルグの方がいい。「三人の裸婦」「寡婦」。コランの挿絵十二枚の「コンポジション」はくだらないものだ。ファボリーといふ人の絵は、いやらしい絵だ。ロートの沢山のものの中では、水彩の風景が一枚気がいい。マンガンののは、どれもこれもきっと生なオレンジ色があって、自分をはねとばす。ピカール・ル・ツー。この人ののはいつか三越で、水彩の面白いのを見たことがあるが、油絵は此の前来たのと同様、生な原色がブッキレブッキレに並んで居るのでいやだ。ラファエリーといふ人の、くすんだ古ぼけた絵を見て居ると、気の毒になる。其他番外室に小さなものだが、フェリシアン・ロップの版画が二枚来て居たので注意して見たが、この人はどうも芸術家ではないらしい。説明的で……。その意味で、ロートレークの方が何等の説明なしで居て、異常なものを人に感じさせる。

それから、自分は九段にまはって又、中村彝氏の遺作展覧会を見る。遠山サン〔ママ〕の一時
間余も話して出て来ると、又三沢に会った。林謙三も一緒に居た。牛込見付〔附〕³³⁵⁾の中で、支那人が傀儡芝居をやっている。あまり巧みなので、永いこと三人で立って見た。

彝氏の遺作展覧会を見て、先づ氏の明治四十一年から四十三年までの絵では、レムブラントを追ったような三つの人物画が目につく。そして、四十四年になって突然に「女」が現はれて居る。即ち一足飛びに積極的に色彩にかかづらって来た。「ダリア」に於て、更に色彩と共にタッチに、ゴッホがやったような強烈さを示して居る。所が、だんだん見てゆくと、色彩は益々豊かに、テクニクスは愈々近えてゆくと共に、一方には何処か暗いような、例へば関根正二氏の絵が持つ「詩」、又石川啄木の歌が持つ「詩」といったような、言はば彝氏の「詩」と見られるようなものが〔濃〕農厚な、全然他の系統のものが交って居る。そこで自分は次のような推断をたくましくする。即ち彝氏は、非常に理智のたけた人だった。其上絶えず勉強することを怠らなかった。そして、この「研究」の結果が（そして色彩に対する敏感が）「女の像」を産み、「田中館博士の像」を「裸体」を「女」を「椅子によれる女」を「エロシエンコの像」を産んだ。——とは言へ、彝氏には小才のきいたといふような点は少しもなかったから、氏の絵では、構図の突飛や、色彩の遊戯や、思ひつきのテクニクスなどは決してない。着実に用意周到で謹厳である。次に他の系統のものが因って生れた所のものは何であるか。謹直な氏が、〔病〕併せて病身（異常な病身）の氏が必然的に負はされた人生観——氏の「詩」である。氏は、

健康のありがたさを知って居るものは
健康者ではない
病人だ……

と云って居る如く、氏は健康なるものへの憧れを持ち、求めて健康なるものを求めたが、そして又よき対象を得て、前記の如き氏の病身を知っては肯ぜられないような処へ出入したとは云へ、又氏は終始氏の「詩」から脱出することが出来なかった。それは、「独り」なる時に益々さうであったにちがひない。斯くして斯うした系統のものが、氏の自画像に最も強く現はれたのは必然である。「友の像」、大正三年の「自画像」、大正八年の蒼ざめた「自画像」「頭骸を持てる肖像」「老母像」がそれである。そして此の「詩」が感覚をも犯して来た処に、氏の立体派を加味したような二三の「静物」が生れた。自分個人としては、是等後記の諸作が好きだ。そして前記の系統のものが、後記の領域にまで侵入して来たのが、「エロシェンコの像」であり、後記の系統のものが、前記の——その現はれはルノアール式でなくて、セザンヌに近く立体的ではあるけれども——前記の圏内にまで突入したのが、「老母像」である。

そこで氏は、美しい色彩を愛でられて来たが、それは自分の云ふよき対象を得た時だけであって、殆ど女の肌にかぎられて居る。試みに他の多くの静物と風景とを見るならば、そこにはほかへした暖かさ乃至し閑かな余祐〔裕〕といふようなものはなくて、突きつめた真実と或は暗さと淋しさとを持って居るのである。

四日

終日ひどい風、冷たい風が乾ききった埃を遠慮なく吹き上げ、吹き流す。研究所の帰り三沢を尋ねて、日暮前に帰って来る。

五日

朝まで昨日の風は吹きつゞけたが、日が高く昇る頃には漸く止んで、暖かい春めいたよい日である。

八日 日曜日

昨日は何うした日か、午後から狂気のような風が吹いて吹いて、空は真赤になってしまふ。埃が、細かい埃が、障子を立ててあるのに室の中までも舞ひこんで、そこら中をざらへにしてしまふ。不快な思ひで半日室の中に閉ぢこもって居る。今日は、だんへに静まって、気温は下って冷たいが落着いて居る。

夜、築地小劇場にゆく。ハウプトマンの「寂しき人々³³⁶⁾」だ。からっきし駄目だ。自分はハウプトマンのものは、四五年前に「沈鐘」と「馭者ヘンシェル」とを読んで居るだけだが、ハウプトマンを評番程のたいした作者だとは思って居なかったが、「沈鐘」は殊別扱ひとして、「ヘンシェル」から措〔推カ〕して、「寂しき人々」で退屈するようなことはない位には思っ居たのだが——からっきし駄目だ。

パンフレット「築地小劇場」で見ると、マックス・フライハンといふ人が（ハウプト

マンの「寂しき人々」に於て、一つの時代に限られて居ると思はれるもの、吾々に対して、もはや直接的に話しかけることが出来ないもの、唯歴史的興味のみにかかって居ると思はれるものは、一元論やダアキニズムスを基礎として居るヨハネス・ラツケラートの人生観位にすぎない)と弁護して居るけれども、自分は彼の弁護を其のままにして、其故に全く退屈な過去のものとして、これを排してもいいようである。否、過去のものでも過去のみのものでないもの、永遠に生き得るものがある。

例へば先達のチェホフの「桜の園」を見るがいい。問題としては過去のものであっても、そこには暖かい作者の同情が深く内にこもって、殆ど冷たい程の客観を通して——更に外形的には、極めてセンチメンタルな要素から(人間の悲み)を誘導し、亡びゆくノスタルチアとでも云へるような涙ぐましい憂愁、静かな悲しみ、更に香り深い空気にまで到達して居る。其上此の曲は、芸術家らしい高い厳密な客観から、平凡な外形の中に必然から必然へ、更に構成へまで豊かにモデリングがされて居る。一体自然主義的な立場に立って居るものは、酷に見える客観性を持たねばならない。そしてその客観が必然によって導かれ、発展させられねばならない。そして其の上で、その客観的必然がその奥に、その内に作者の主観を奏出しなければならない。

扱て、然るに「寂しき人々」に於ては、主人公ヨハネスが怪しげな偶然である。譬へ時代の事実であつたにした所で、ヨハネスは奇怪の為の奇怪であることを免れない。却つてフランツ・シュルテが(世間人であるブラウンは、気の悪い人間であるのに加へて、無理にも小人の環境を押上げて、高く飛び上らうと思つて居る。近代的の気分者の生活を纏めて、此処に表はす耐へ得られない輩である)[パンフレット築地小劇場]といつて居る所のブラウンの方が、余程時代人としての必然性を多く持つて居るのである。要するに、此曲に実際に現はれたヨハネスは、あの悩みを悩むには、あまりに小さな影法師のようなくだらない人物であり、遠い理想と寂しい意志を以てヨハネスを後援し、超現代(当時)的なるアンナ・マールは、あまりに貧弱な女にしか描かれて居ないのである。だから、「問題」との間に距離があり、見て居ると滑稽なものとなつてしまふのである。そして、極めて重要なこの二人の姿が不完全である為に、此曲は時代的なものにさへなれないばかりか、自然主義的な立場をさへ疑はしめるような、力のないものになつて了つて居るのである。

ケーテは、微妙に丸刻にされて居る。そして、父親のラツケラート、母親のラツケラート夫人のユーモアによつて、此の曲が僅かに観客をごまかさうとするのである。駄目だ! 山本安英のケーテがよく描かれた役をよく演つた。外の人達は損をしたようなものだ。丸山定夫は、フランツ・シュルテの解釈したブラウンではなくて、自分の見るようなブラウンを、極めて愉快地に演つて居る。

九日

午後、日はま春のように明るかったが、又花時らしい風がむう〜と強い。

十日

研究所の帰り、江波の処へ行く。原瀬が丁度来る。江波の所で夕食をすませて、自分は帝劇にゆく。伊太利カーピ歌劇団の公演で、今夜は「ラ・ボエーム」である。一昨年の正月には三日も見に行っただのに、今度はこれがはじめて又終りであるらしい。決してつまらないからではない。金がないからである。だが一般にも亦自分の如くであるのか、自分は開演前数分になって帝劇に行っただのであるが、三階はひどくすいて居た。で自分は一番前の席がとれた。有難くもある。だが特にすばらしくいいと思ふ所もなかった。其処には解説にあるように、ミュルジェーの云ふ「陽気ではあるが、恐ろしい（おそろしい）」ものもなかった。第一幕の二重唱も、第三幕の「さらば」も、あまり叙情的な感じがしなかった。けれども、第二幕のミュセッタのワルツは、印象が強かったし、第四幕の幕切は道がによかった。

それにしても、一年に一度は斯うしたものが来てほしいし、見度いものである。テノールのジレッタはひどく優れたとは云へないまでも、前に来たカッペリのようなやみがない。ピガルディは、前に来た時と少しでも変っては居なかった。全く前の時のことを、昨年のことのように思ひ出す程、それ程少しも変って居ない。

ミミは、あの太ったアムプロゾがやったので、ほんの少しばかり似合はなかったが、道にうまかった。ミュセッタになったカステラニと云ふ人は、細くて明るくて、前に来たバラリンを思はせるが、更に動作が大きくて、華やかで、厳密な意味で芸術的と云へないまでも（これはこれらの歌劇団の全体にも云へるのだが）、実に達者なものである。ずっと前の露国歌劇のブルスカヤのミニヨン（カザンスカの女優）は、今でも思ひ出す程印象に残って居るし、前の時のジオルヂのバリアッチ、アムプロゾのバターフライの或る場面などなども随分よかったと思ふのだが——でも、今度も兎も角見て置いてよかった。見なかったら、きっと心残りだったらうから。随分皆豊かな声量をもって居るが、それにも係らず、オーケストラは一般に強過ぎたようである。ボエームは、自分は断片的にさへ殆ど全く知らなかったので、色々の印象はあるが、何処の何と指すことが出来ない。二幕目のカステラニが、はでであったせいもあらうけれども、一番強く印象に残って居る。或は斯うしたボエームのような印象的スケッチ風のものでは、或種のマンナー乃至印象的な表現——技巧が第一義的な位置を当然持つかも知れない故に、或はさうした立場から云ふならば、カステラニなどはすばらしく優れて居るとさへ云へるだらう。

〔欄外に記す〕
[ロドルフォ ジレッタ
マルチェロ ピガルディ

コリーン ミロッキ
ショーナール コンティニ
ベノア パテルナ
ミミ アムプロゾ
ミュセッタ カステラニ
アルチンドロ パテルナ]

十一日

又風だ。きたならしい、しぶとい風が吹き続ける。午後、小石川へ行く。晩、中井が遊びに来る。

十二日

狂気のような日、夜のように暗くなって、真冬のような凍った風が吹いて、嵐のような雨がしのつき、雪が降って、さて午からは日があたって居る。江波がやって来て、台湾行を盛に強いてゆく。行っても見たいものだが。夜がひどく冷えて

十三日

晴天、気温は然しまだへ下って寒い。午後江波を尋ねる。台湾行は愈々本物になるらしく——江波と石膏屋へ行って外型を五六眺へてくる。それから、銀座にまはって、郵船会社の出張所に行ったが、引越してしまっていてわからない。東京駅のは已に閉って居る。疲れて丸ビルでお茶をのんで帰って来る。

十四日

十二時五十分の汽車で鎌倉にゆく。丁度四時の汽車で叔母様が昌道をつれて、東京に宿りがけて出られる所だったので、皆に喜ばれる。

十五日 日曜日

何故か、自分が鎌倉に来ると、必ず天气が悪い。終日暗く曇って、雨が降ったり降^(止)んだりするので、終日二人の子供の相手をしたり、退屈してちごこまったりしてゐる。で自分は、三畳の高い棚の上に埃だらけになって居る本をタンネンにひっくりかへした。けれども、何も読めるものはなかった。祖父様の読まれた、虫の食った日本とちのややこしい四角い字ばかりならんだ本が、殆ど全部だった。イネが毎晩のお惣菜の為に利用し古るした、料理の雑誌などが多かった。その中から自分は唯一冊、トルストイの「イヴン・イリイッチの死」(附、「主人と下男」「高架索の捕虜」)を見つけた。此の本は二三年来、いつも鎌倉に来て手に取った本だ。夏の暑い日中、二階か奥の座敷にね

ころんで読みかけた本だ。而もその又、いつでも決して五頁とは読んだことのない本だ。その又いつでも自分は、今度こそはせめて一つだけでも読み上げようと思った。そして、又いつでも丁度五頁程も読むと、何とはない臭味といったようなものに阻まれては、読むのを止めてしまった本だ。ところで、斯うした悪い方の因縁のついた本を今度こそ、今日こそ塵をはらって読み出して、そして「イヴン・イリッチの死」を、遂に読み上げたのである。其上今度は反対に、自分を半日の退屈から救ってくれたのである。だがここで理屈っぽく云ふならば——このコクメイな写実的手法は、自分に対して妙に高圧的に働きかけるので——

死のゐる坐には光がゐた。

「では、こいつがさうなんだ」と彼は思はず大きな声を出して叫んだ。

「嬉しい！」

が、自分には単なる、実に単なる慰めに過ぎないように思はれてならない。猶いふならば、トルストイ自身にさへ、そんな慰めに過ぎなかったのではないかと思はれる位力ない気がする。

も一つ。写実的手法は当然、極めて自然に読者をして「事実」へ導き、「事実」として観じ、「事実」として肯せしめねばならない——にも拘らず、自分はイヴン・イリッチの無自覚から自覚への道程及び結着……。何うして、及び何故か、を今一段間ひ返したい気がするのは何故か？

晚九時二十分の汽車を迎へに、駅まで提灯をつけて出たら——雨は止んで居たが、道は暗くてぬかるんで居た——梅子叔母様は、丁度乗りあはせて帰られた。十二時までお茶を飲んでおはなしして床に就く。

十六日

朝が明るい。が午後は情けなく曇ってしまふ。

〔欄外に記す〕

〔✓一夜さの雨はありがたきかなけさ見ればうるめる土のこの太芽はも〕

十七日

朝が爽やかだった。明るくて冷えて薄霜がおりて居た。で自分は朝、顔を洗ふと、食事前に庭下駄をひっかけて外に出た。庭が何となく懐しかった。それなのに、これといって気にとまるものもなかった。だから、庭は物足りなかった。自分は裏にまはって涯〔崖〕を上って物置場を見に行つた。物置は雑多なもので、ちらかるだけちらかつて居た。鶏小屋には、鶏がもう一羽も居ないで、戸が開いたまま傾いて竹垣が腐って、金網が錆びて穴があいて居た。猿小屋と小禽小屋とは昔のままの所にあつたが、ここにも何も居なかった。尤も猿は、とうのむかしにシモヤケで——猿は南洋種の小さな尾の長い奴だった——死んで、其の後ここにはおとなしい烏骨鶏が五六羽、いつも蔭鬱にちぢこまって

居たのである。小禽小屋はもと、台湾鳩の為に造られたので、一羽の方のなどは、十年もここに生きて居たのだが、その後は暫らく、茅ヶ崎からもって来た鶉が十羽程も飼はれて、祖母が毎朝卵の数を楽しんで居た。鶉は一羽死に、一羽死に——多く冬の朝死んで居た。祖母も亡くなった。これらも亦懐しかったのに、さて別段の興味も持つことが出来なかった。それ故、これらも亦物足りなかった。で自分は、大きな黄色い実のついた橙の低い枝をこぐって、ここから続く裏山に登りはじめた。けれども道はもう、まるでなくなって居た。大きな枯枝が横たはって、重なりあって居た。自分はそれらを片よせたり、またいだりして登った。岩土のくづれて居る所では、木の根か枯草をたぐって上らねばならなかった。漸く自分は、ひどくくづれおちた木のない所にまで登った。ここからは、真正面に海が高々と浮き上って見晴らせ、鎌倉中の町が目の下に小さくなった。今一段上れば頂上で、もと自分達がいつも登り、粗末な縁台に休んだ所なのだが、今は——一昨年の地震で——すっかり崩れおちて、はだかの岩が急な崖になって居るので、足袋はだしにでもならなければ上れなかった。で自分はここで登るのを止めて立ってふりかへて、懐かしい眺めを久々に眺めた。ここはもうまともに目があたって、明るくて暖かだった。ここから見ると、もう鎌倉も空地といふようなものは殆どなかった。十年前の眺めとはまるでちがって居る。藁葺の家はもう数へる程しかない。そしてそのかほりに、そこにもここにも立派な西洋館の赤屋根が出来た。遠く松林の頭の低い所からは、その向ふに浪が白くくだけるのがはっきりと見える。けれども、音は聞えるといふにはあまりにかすかだ。海は青く平らで、潮の流れる所だらう、不規則に、はっきり色がかはって居た。自分をつくへい脱カと眺めた。だが何とふ不思議だらう。自分はいつになく感傷心が来ないのに、物足らない気持をおぼえた。感傷——まったくあまり有がたくない。それなのに、何故か今自分はそんなものをほしがって居るなんて！だがつまりいつまでたっても、それは自分に来なかった。或は既に自分から、それはあまり遠いものになってしまったのかも知れない。自分は用心深く足もとに気をつけて下りて来た。朝食のパンと紅茶はうまかった。

十時十四分の汽車に間に合ふように、自分は停車場に行った。駅の前柴山直矢の小さなオモチャ屋で煙草を買って帰って来ると、自分は若いS侯爵とK子爵とを見かけた。S侯は、これから議会に行くのだらう。K子は、軍服をつけて居るから、横須賀へ出てゆくのだらう。二人とも学校では、自分よりも五六年上のクラスで、多分自分の亡くなった一番下の叔父と同じ位柴山直矢だだったと思ふ。K子は、自分の方で顔だけ知って居るだけだ。S侯は、自分が斯くも変りはててからも、幾度か色んな所で逢って、向ふでも自分を知って居る。だが、或はだから、自分は横を向いて二人を先に通してしまふ。自分は汽車が来るか来ない頃にプラットフォームに上って、直ぐに自分の車に乗ってしまふ。車内は明るくて

きたなかった。自分は、やっと席を得て、オーバーのポケットから本を出して読みはじめた。トルストイの「主人と下男」を。『ワシリー・アンドレイッチはニキタの云ふことを聞いて、右へ曲った。併し路はなかった。彼等は斯んな風にして暫らく進んで行った。風は止まなかった。雪は降った。』

ところが、大船で沢山の人が降りたので、自分は窓ぎわの席に楽々と腰かけることが出来た。自分は本をふせて、窓から外をながめた。外は明るく、眺めは暖かかった。樹の茂った低い山と山との間を細くうね〜と、何処までかつづいて居るような田がいくつでもあった。田面は冬枯のままであるけれども、そこに差して居る日は、明らかに春めて居た。低い丘は、なだらかな傾斜のままにたがやされ、そして段々になって段々に高く上まで畑になって居て、麦が青々と大分大きくなって居る。所々に残って居る大きな櫻や、檜、くぬぎ等の雑木林や、低いどんぐりの叢など、まだ芽ぐんでは居ないけれども、穂先を艶々と赤らめて居る。鉄道の沿線には、所々人夫等が涯〔崖〕を開いて楮土を運んで居り、平らな新しい斜土に彼等は石を豊んで居た。そしてここにも、春の日はいっばいに降って居る。空は青くて大きかった。だがそれらも僅かの間だった。程ヶ谷〔保土ヶ谷〕を出て横浜に入らうとすると、眺めはがらっとよごれてしまった。趣のないちぐはぐな家がならんで居た。一年半前の焼跡がそのままになって居た。空も亦どろんとなった。自分はもう外を見ないで、又々トルストイを読みはじめた。『一方では又五杯目の茶を飲んで、ニキタはまだ茶碗を引覆へさずに、自分の傍へ置き、更に六杯目を注いで貰ひたがって居た。併しワシリー・アンドレイッチは、逸早く着物を着かへて居るので、何としたってもう駄目だ。ニキタは立上って、角を残らず嘸み減らした砂糖の塊を砂糖壺へ入れ、半外套の裾で汗のだら〜流れる顔を拭って、さて自分の着物を着始めた。……ニキタは宿ってゐたかった。彼れはしかし、ずっと以前から自分の意志といふものは持たず、総て人の云ひなりになる癖になってゐた。斯ういふわけで、彼等の出立を遮るものと云つては、誰一人なかった。』

昼前に東京に着いたら、風がひどかった。空気が冷たくて、埃がうるさかった。マルビルの地下室を降りて、簡単な食事をとってお茶の水へ出て、江波を尋ねる。で空気は全く違って居て、江波は友達のマンドリンにギターをあはせて居た。忽ち友達はほったらかされて、自分は歌を唱はせられた。だが自分は又、トロバトーレの Ah, I have sighed to rest を気持よく唱った。晩飯も江波と共にした。全く暗くなってから、江波と外に出た。電車で青山に出て、暗い道を歩いた。珍らしく空が澄んで、星が降るようだった。

原瀬の所では、奥サンが風気でねて居た。原瀬の所には、新しい絵が幾枚か出来て居た。十時半まで喋って外に出た。神宮前の通は、一人一人通らなかった。一しほ寒かつ

たが、気持のいい夜だった。原宿の駅まで原瀬が送ってくれた。代々木で江波と別れて、自分は中野にかへった。東中野で乗った人が、中野の火事を知らせてくれた。東中野の駅から真直に中野駅の左手に火が燃えて見える。で中野にかへる電車の中の人達の、一様に幽かな不安が見えた。中野駅から線路に沿うた路を、在郷軍人だの若いものなの、提灯を下げて忙しげに徒歩で、又自転車で行ったり来たりした。火事は自分達の家のすぐそばだった。道で久頭と逢って、一緒に火事場に行った時は、まだ盛に燃えては居たけれども、人も沢山集って居るし、もう下火に向って居た。自分はまるで自分の家の近所だといふことを、前から知って居たにもかかはらず、ちっとも心かはやらなかった。だから家にかへって玄関の前に馬尻に一ぱいの水がくまれてあり、箒がころがって居るのを見て、寧ろ意外だった。二十分前に、此の辺は大変なさわぎをやったらしい。家に上ってからも——十二時だった——何となくざわ〜と人のけはひがした。そのうちに又、半鐘が続けざまに鳴った。兄が帰って来て、踏切の向ふの新らしい火事について話した。風がひどくなってゆく。

十八日

朝おそく研究所へ行ってみたが、人がいっぱいでもどうすることも出来ない。で神田にまはって本など買って帰ってくる。台湾行で気が落つかない所へもって来て、手のぶつぶつの為には手が思ふように洗へない。その上ぎごちなくて何にも出来ない。そしてこんな時、新らしい彫刻がしたくてたまらない。だから、自分で自分をだましましして居る。

十九日

晴天、風烈し。午後、江波が来る。晩、文ちゃんが来る。

二十日

午後、江波を尋ね、一緒に松平にゆき、神田に出、買物などして、暮れて帰る。風烈しくて気色悪し。

二十一日

朝のうち、荷物を揃へたりして居るうちに、時間が速くたってしまふ。今日は二週間目で、天晴らかに無風、本当に閑かだと云へるような日である。午後小石川へ行く。叔母様が御留守なので、梅サンの仕事をして居る所へ行行って話したり、庭に出て敬太と遊んだりして夕方まで過したので、御飯を食べて帰らうとすると、^(与志)久敬が帰って来たので、十時頃まで話して帰って来る。夜が冬のように寒い。

二十二日

午後、小城サンと遠山サンに行つて来る。

二十三日

春雨止んだり降ったり、終日寒い。江波と東京駅に行つて、台湾行の切符を買つて来る。二十六日の船のつもりだったが、都合で二十九日の船にする。

二十四日

小石川へ行つて敬チャンと昼食を共にし、江波を尋ねる。留守だったが、暫らくして、宮田、原瀬と一緒に帰つて来る。原瀬と一緒に原瀬の家に晩方行つて、絵具箱を借りて来る。

今日はまた昼間から夜まで、むう〜と暑い。気候は決してよくない。落ち着かない、落ち着かない、落ち着かない。

自分の中には、正に爆発するものがある。自分は、それが此の旅と共に爆発することを望み恐れて居る。

二十七日

此の三日、曇つて寒くてばら〜雨が降つたりして——そして、自分は相変わらず歩いて居る。今日は、午後、高円寺の郵便局から金を受取つて牛込へ出て、田辺サンに行く。三時半に辞して、佐々木六郎の家を尋ねたが、留守。その足で青山に向つて本多正震を尋ね、晩サンを御馳走になつて、十時に家に帰つて来る。

二十八日

天気はいい。愈々今日は立つといふので、一日家に落ち着いて居る。五時に家を出て丸ビルで簡単に食事をすませて、まてども〜江波が来ない。一足先へプラットフォームへ入つたら、江波があはててやつて来る。けれどももう席がない。で次の八時半の一二等急行までのばすことにする。見送り人が多いので気の毒ではあったが。自分は、旅立ったことがないので、母が珍らしく来て居る。久顕サンも出て居る。それに、英子サンも忠坊をつれて来て居る。田辺サンの兄弟三人が来て居る。原瀬と宮田が来て居る。それに、江波の家からは、これはまたお母様をはじめ、エイ子サン、知之サン、知シゲサン、ツーチャン、マサチャンといふ多勢だ。だが、又、其故に大きな荷物も何の荷にならない。それから、又次の汽車では、真違ひなく自分達と荷物の場所をこしらへることが出来る。汽車は何とかかとか云ひながら、かなりよく寝たようだし。けれど、夜が明けて京都に着いた頃から、すっかり曇つてしまふ。神戸までます〜曇つて暗く、乗船〔欄外に記す〕 [吉野丸 (旧独船クライスト)] する頃から、ポツポツ雨になる。十二時に出航してからも、

景色はまるで霧の中につつまれてしまふ。

船が出航して三時間たつと
私達の船は
ほんの猫の額のような
幅の狭い内海を走って居るのだが――
サロンには誰一人 人影がない
空は始めから曇って居たが
冷たい雨をのせて風が出て来た
北方の空を限って 高く低く
うね〜と続いた陸地は
早く霧のうしろに消え
ひと時ごつ〜と堅く
灰青に空を切って居た南側の遠山も
重く重く垂れて落ちた雲がかたもなくぬりつぶしてしまった
サロンには誰一人 人影が^{〔な脱カ〕}い
私は独り 本を手にして居るのだが
(あいにく私の本には
六ヶ敷い議論と唐突な独断とが
言はば極めてイキな言葉で
意味ではない
感覚のアラベスクを織りついである)
私は慣れない船の、幾分風を喰った
不思議に柔らかい動揺の中に
活字が浮上り 沈み落ち
思想が紙屑のようにたわいなく
引ちぎれ、ちり去ってゆくのを何うすることも出来ない
だから私は諦らめて本を下に置き
一本の煙草に火をうつして
さて何ぞ気楽な話し相手がほしいのですが――
だがみんなベッドの上に
毛布にくるまって横になってしまったのか
サロンには誰一人 人影がない

外では風が吹き
私のうしろでは
船の小さな円窓の厚い硝子が
絶間なくひいひい鳴いて居る
そして私は机にかけた肘の下に
エンジンの小きざみな蠢動と
鈍く、水の向うですのような音響とを感じ続ける……………

[×を附す]

何をして何う時間がたったか分からない。兎も角本を読んだが、頭が悪くて着着かなかった。腹がすいて飯がうまかった。晩、江波とバーに行つて見る。ここでは気分が落ついて酒がうまかった。早く九時半過ぎに床に就く。

三十日

朝早く起きると、海の上にはぼんやりした黄色い日が上つて居る。七時に食事をして、暫らくすると門司に入った。それからといふもの、午後四時過ぎるまで退屈する。本を読む程着かない。大概の人々は上陸したが、自分達は風が烈しくて寒いので、船に残つて居たのだ。スケッチをしたりしたが、面白くない。夕方一寸寝て、八時半頃から江波とバーにゆく。下手な二人でショーギをうって、十時半にひき上げて来る。夕方出航前から^[玄界]ゲンカイ灘の揺れを警カイされて居たが——朝から曇つて風が寒かった。——何ともない。

三十一日

日の出は美しかったが、結局終日曇つて居る。午前中、五嶋の嶋が二つ程見えて居たが、午後には四方唯海で、何にも見えない。朝船員にデッキビリアードのルールを教へてもらつて、まがなすぎがなビリアードをやつてすごす。航海は、あひかはらず全く静かだ。夕方前から細かい雨になつたが、気温はぬくぬくと温かい。八時半にバーに行つて、今日はビールの冷たいのを甘いと思ふ。

四月

一日

午前中雨が降つて退屈しきつて居たが、午後、雨も止んでどうやら甲板がかわいたので、デッキビリヤードをして遊ぶ。終日全く海にかこまれて、今日のまる一日遠い寫影

一つ見ない。

二日

朝四時半にボーイに起されると、船はキールン³³⁷⁾の港外に既にとまって居る。そして、夜明をまって港に入り、六時半に岸壁につく。どんよりと、全くどんよりと曇って、じめじめと湿ってぬくぬくと暖かい。新緑の候である。七時半の汽車でキールンから台北³³⁸⁾にむかふ。途中の景色は一時間、自分達を飽きさせない。台北の駅に、中嶋が奥サンとナンチャンをつれて出て居てくれ、自分達は暫く後に東門町の中嶋の所に落ちつく。

三日

午前中、江波と台北市中をぶらぶら歩いて来る。東門から新公園に出、公園の中をぬけて——公園は綺麗で、丁度神武天皇祭なので、人が出さかっている——西門市場に入って見る。淡水河³³⁹⁾の堤防の水門から河を見、北門から大稻埕³⁴⁰⁾の方に行かうとすると、雨がぱらぱら来たので、ひきかへして、台北駅前の三線道路を東へつきあたって、東門町の商工学校をまはって、十二時に帰って来る。午後雨が止んだので、又外に出て、新公園に草花盆栽の品評会を見る。珍しいものがある。

四日

終日雨が降ったり止んだりして、冷え冷えとする。だから、終日家に居て、何をしたことか。

五日 日曜日

雨

六日

天気は少しでもよくなる。だから、朝のうちに郵便局に行き、暫らく街を歩いたが、直ぐに帰って来る。

七日

天気は決してよくなる。終日ごろごろして、トランプなどして居る。夕方僅かの晴間に、食後の三十分散歩して来る。三方の山に雲が白くかかって、連山の処々明るい空に、頂がはっきりと黒く見えて居る。商工学校のグラウンドを二まはりして東の三線道路に出、東門まで歩いて左へまはって帰って来る。夜、おぼろな月が見えたが、ぢきに見えなくなつた。^{〔て脱カ〕}了ふ。

- ✓ 藍色の山妙に近くて群山の山ふところに雲蟠る
- ✓ なが雨のあめ晴れしゆふべそことなく出でてゆけば蝙蝠飛ぶも

八日

朝三十分程明るい日を見た。だがすぐに曇ってしまった。江波と朝のうちに植物園に行ってくる。大王ヤシ、孔雀ヤシ、タコノ木等、南国の片っぱしが美しくのぞかれる。五六枚小さなスケッチをして、雨に降られて帰ってくる。

九日

天気は悪い。朝から雨が降って居たが、午後どうやら止んだので、江波と大稲埕に出かける。支那人町は愉快で来たなくて、雑沓して居る。一時間半も歩きまはって、林能光³⁴¹⁾の家を尋ねたが、留守だった。帰りに栄町の辺に出ると、さわがしい音がするので見ると、北の方から一隊の行列が来るので、立って待って居る。行列は直ぐに自分達の前にやって来る。きたならしい支那人の老若の行列で、赤や青や白や三角や四角のとりへみの旗をかざした一隊につづいて、さわがしい楽隊が来る。楽隊といっても、実は^[噪]燥音隊、雑音隊で、太鼓が出鱈目にたたかれる。大小の鈔がやけくそになぐられる。チャルメラのような笛がかん高く吹きまくられる。銅鐘がグアーングアーンと無作法に鳴る。実にリズムといへないリズム、音でない音で、騒々しく不規律でやけくそである。又、旗行列が来る。雑音隊が来る。又、旗行列が来る。騒音隊が来る。妙な木彫の——何のわけだか分からない手のこんだ——額がかつがれて居る。何ともつかないものが来る。それからとんでもない大きな、それは一丈六尺もあると思はれる真青な顔にすごい髯をはやして、古びた併し着飾った人形が裕々とやって来る。それから同じ大人形、然し黒褐色のテカテカ光る顔をしたのが、やっぱり容々と歩いて来た。それから旗が来る。それから、つめ襟の洋服のユニフォームの、今度は三文楽隊——真鑰喇叭の七八人が、是れ又妙な支那楽じみたメロディーでマーチを奏して進んだ。きたない子供達がついて行った。それで行列は畢った。ひどく原始的な野蕃な行列だった。ツオーファーに、あれは何だいと聞いたら、まづい日本語で、知らないと言って、気まづさうに笑って居た、帰って中寫に聞いたら、何でも悪魔払ひのまじなひで、大きなノッポの人形は、范將軍と云ふのださうだ。同じようなもので、ズングリと短い謝？將軍といふのがあるさうだ。

十日

昨日、永楽町の林能光の処で、二三日前に築地町に越した事をきいたので、念の為、朝から江波と築地町三丁目六番地をさがした。五、六、七番地が一郭になって居て分り^[ママ]安い処だったが、肝心のそれらしい一番大きな家には表札もなく、大工が入って居たので途中で手紙をポストに入れて、真直に南にぬけ、植物園の中を歩いて大南門に出て、

昼に帰ってくる。自分達の歩いて居る間雨は降らず、時々薄日さへあたたったが、午後は又々いけない。

十一日

昨夜一晩降った雨がまだ止まないで、糠のような小雨が落ちつづける。皆元気がぬけて、トランプをはじめた処へ、林熊光が来てくれた。一時間程居て帰った。明日台南の方に立つとかで、今日だけしか時がないから、よかったら北投の温泉³⁴²に案内しようといってくれる。早速甘へる。そこで、午後二時半に約束通り、大成火災に熊光を尋ねる。熊光が電話をかけてくれたので、林履信³⁴³も来て居た。丁度雨も止んだ。四人で自動車で出かける。東門の三線道路を真直に郭外へ出ると、両側に並木の綺麗に並んだ国道が何処までも続いた。途[・]中[・]台[・]湾[・]神[・]社[・]の[・]鳥[・]居[・]前[・]を[・]通[・]つ[・]て[・]二[・]十[・]五[・]分[・]も[・]行[・]く[・]と[・]目[・]的[・]地[・]に[・]つ[・]く[・]。八勝園におさまって、た[・]ん[・]ぜん[・]に[・]着[・]か[・]へ[・]ると[・]ゆ[・]つ[・]た[・]り[・]と[・]す[・]。山を一まはりして、公共浴場の大きな風呂湯につかって公園を一まはりして来ると、いい程にがっかりする。雨つづきで人が少なく、静かで気持ちいい。日本料理で日本酒で八時までかかって夕食を畢って、一休みして自動車で町に帰って来る。真直に皆で熊光の処へ招れて、熊光の集めて居る仏像を見せて貰ふ。なかへ立派なものが、金目を惜しまず集められて居る。天龍あたりの石の仏首二つ及び銅の仏首二つなど、骨董以上のものであり、東京で求めたといふ支那の四つの土偶もいいものだった。十時に履信と共に辞して、少しばかり夜の街を歩いて新公園のこちらで、履信にわかれて帰って来る。

十三日

林履信兄。

今、朝の六時です。僕は寢床の上に腹這ひになって、これを書き出したところです。もう恐らく一時間程前から目が覚めて、そしてその一時間程も上の方を向いて目をつぶって、うつらうつらして居ました。その間に昨日の半日の出来事が、ぐるへと何度も何度もくりかへし思ひ出されました。朝のうち、新公園から栄町の方を花祭りの群衆の中をぶらへねって歩いて——昨日は渡台以来はじめての晴天で、朝から気が浮き立って居ました——帰って来る途中で、君の処に電話をかけたのでした。で家に帰りつくと、一寸休んで直ぐに又トーシャ³⁴⁴に乗りました。トーシャの上で小さな地図を一生懸命に見て居たつもりでしたが、結局まごついてしまったのです。車屋に君の名刺と処とを出して見せて近所の人にきかせたのですが、車屋は分ったとも分らないともはっきりしない顔つきで、何かぶつへ云ひながら、馳け出しました。車の上で僕達は兎も角もここで車をかへして——もう下壱府町まで来て居ることは解って居ましたから、ぶらへ歩いて君の家をさがそうか、など相談をはじめました。全く少しばかりなさけなかったのです。

そこへ丁度、君からの迎への者が僕達を見つけてくれたのです。僕達はほっとしました。全く言葉の少しもわからないといふことは、心細いものです。君の処の蓄音機で、僕達は莫然たる支那の概念の中に、更に同じように莫然とながら、北方と南方との概念を得たわけです。処で僕は、彫刻史などでうすうす知って来た支那文明の北進と、それにとまって行く内容形式の推移をふりかへって、この事を前から知って居た筈のように思へるのですが。

それから東蒼芳では、瓜子の食べ方に興味をもちました。料理は、炒九吼をはじめ、蛙も豚も大変おいしいと思ひ、又沢山食べたのですが、結局僕の胃袋はオサシミ料理より以上の抱擁力を持たなかったと見えますね。ベッピンサン幼仔は又意外でした。それは僕の風俗習慣に対する無理解から来るのかも知れませんが、僕は幼仔から淫らなところ、あゝした職業にとまふ卑しい感じといふようなものを全く受け取りませんでした。そして、其のかはりに、幼仔が琵琶をひいて歌った姿と調子と、それから彼女の小さな、併し、細かく気をつけて作られた室とは、僕を立派な詩人にしてしまひました。北投の自然もいいと思ひますけれども——北投があまりに日本式であることは、此処では問題ではありません——彼女の室には、それは幾分廢頹的であり、感傷的ではあつても——或は又其故に豊かな人間味があり、情調の細やかなものがあります。

昨日はほんとうにいいものを見せて戴きました。昨日こそ、はじめて台湾に来たような気がしました。厚く御礼申し上げます。

〔欄外に記す〕
[幼仔 ユーワ]

十四日

朝から馬力をかけて石膏いぢりをしたが、結局あまり手がまはらなかつた。午後、林履信が尋ねてくれたので、三時から一緒に萬華³⁴⁵⁾の方を一まはり案内してもらふ。萬華は今日お祭りで、例の長い行列を見た。今日は、沢山の謝范二将軍を見た。萬華の遊郭も昼間見ると実にきたない。淡水河には、ジャンクが帆を立てて沢山上って行つた。西門で履信と分れる。明日は履信に板橋につれて行って貰ふ。

〔欄外に記す〕
[萬華では、最近出来た龍山寺³⁴⁶⁾を見てくる。馬鹿らしく金をかけたもので、木彫は日光のそれよりも手がこんで居る上に、石柱の大きなものに同じような複雑な彫りがしてある。とんでもない金を食って居るものだが、^{〔複〕}つみ木のように、おもちゃのようで、くどくて滑稽だった。]

十五日

又雨。だから、^{バンキョウ}板橋行は止めになる。

十六日

雨は決して止まない。半日の間、退屈して何うにも仕方のない午後を、履信の家にゆく。

十七日

雨。今日は、青木の命日だが――

十八日

気持よく晴れる。石膏をいぢる。はかどる。晩、江波と散歩がてら買物にゆく。ペンキがないので、町中歩きまはる。公園で活動写真があったので、馬鹿な顔して見て居る。摂政宮御渡台行啓。漫画帖。など。

十九日 日曜日

雨。糠のような雨が終日降り続け、退屈で退屈で退屈で

二十日

午前、晴、午後、雨。

二十一日

晴。林履信から手紙で、今日神戸に立つのを止めたから、明日天気ならば、枋橋に案内しようとしてくれる。明日が天気であるように。

二十二日

午食後、一時前に台北駅に行って居た。今日は又、真夏のように暑くてまぶしくて風がない。

直ぐに履信が来た。十分程して汽車が来た。一行に尾崎氏が加はった。南へ満華の次の駅が板橋である。私達は車を連ねて、林家五十年前の栄華の跡、当時林家の総本拠³⁴⁷⁾にゆく。それは、板橋の平地、田圃から一段高く築かれた住宅と庭園との一郭だ。荒れ果てて、廢れはてて居るけれども、当時の永耀を思ふに充分なものがある。履信が小さい時には、池に水をたたへ、画舫を浮かべて居たさうだが、二十年後の今日の有様は、実に悲惨にも頽れて、池の水は乾いて青苔がじめ〜して居る。

けれども、庭園は実に周到に計画され、金と時とを度外して作られた立派なものである。それは、^{〔複〕}復雑で何といはうか、小堀遠州あたりとは全く趣を異にして居ながら、又何処かに一つの計画を持って居る。其処の亭、此処の樓も、酷く荒れて居る。隧道式の道の両側には、漆喰に字がきざまれ絵が彫られて居るが、全くらくはくして生々しい白でぬりかへられた処もあり、額なども多くぬすみ去られて、見るかげもない。邸宅の方

は二三年前、火事に逢ったのださうで、今修理を加へられて居るが、其の以前はもっと甚だしく、すべて乞食の巢だったさうだ。最近になって、ぼっぼっ段々に修善されては居るが、到底元の面影にかへるべくも見えない。

今は僅に番人を置き、庭園の方は一般人に公開されて居る。油絵でスケッチを一枚とったが、失敗。帰りは皆でぶら〜街を歩いて、五時二十分の汽車で台北に帰って来る。

二十三日

晴。日暮方から細雨。夜、豊田が来る。

二十四日

曇。晴。夜、散歩。

二十五日

晴天。午前三人で総督府に行き、木下内務部長と井出^{〔繕〕}營膳課長に引合はされる。午後、夕方、雷鳴、驟雨、軽少。夜、散歩。

^{〔欄外に記す〕}
[久顕から送って来た歌。]

(遠く台湾に行きし兄を思ひてよめる)

玄海の浪押し渡りわが兄は奄美大しま今かゆくらむ

台湾のしま遠みかも吾が兄は恙くてゐませ又もあはむまで

しきしまのやまとを置きて君いなば桜の花は見ずにかもあらむ

なか〜にうまく且つやすければ心してバナナこそくらへはらこわすまいぞ

毒へびのかまぬといふぞむかばきを召して行きませ黒のむかばき。

(兄が台湾の旅に出ましてよりとらの絵のいかめしき様のかげもの床にかけ給ひて古へよ旅の人ある時にはとらの絵をかくものよと母人の独り言し給ひけるにこのふり事を人の子の母の情とかた〜あかず思はれければ)

吾が兄が遠出の日より吾が母がかかげましたる墨絵虎これ。

太竹のたけの根元に腰すゑて眼らん〜谷をしもにらむ。

この虎の猛きが如く曲事をうち振り離けて家にかへりませ (三首聯体処女作)]

久顕兄。大元気。風邪もひかない。蟲もわからない。歌更になし。兄、歌心猛烈、詠草百二十は正に驚畏。目下停滞は無理なし。そのうち追ひ〜筆を加へて送ってほしい。調子は益々あの調子なること、今度の御送歌にて拝承。テニスコート無料使用は結構。桜が散っても電車に花が咲けば是亦結構。多少の鱈は相對觀を強めるものと思へば腹も

立たざるべし。当地に来て全く歌なし。それよりも、そんな気分なし。ローカルカラーは強けれど、生活に精神的なるもの全くなければなり。そこゆゑに、兄のアイデアを仮りに借りて次の如く応ふべし。

- しきしまのやまとを置いてわが来つれば桜の花を今年は見ずけり
- なかなか腹こわすものか芭蕉実を安価く且つうまく食ひは食へとも（当地にては一般にバナナを芭蕉実といふ）
- むかばきをはけと汝はいふか台北にまむしはおろかみみずも這はぬを。
.....
- 母人は虎の絵を掛けて旅の子を幸くしあれと願ふといふか
- 虎の絵を掛けて旅の子を幸くあれと願ふ母人のその子幸くある。

ステキなことが養子問題でもあるならば、大いに賛成（先は勝手たるべし）幸運をり、萬福を投げる。（それとももっとすてきかな）

-
- 台湾は歌なきところ柿本人麿歌集送り下され

四月二十五日 台湾ニテ

久功。

二十六日 日曜日

昨夜は雨風がはげしく、気温が盛に上下した。昨夜は閃光遠雷を聞いたので、今日は晴れると思ったが、事実は気温がぐっと下って、終日雨が降ったり止んだりして居る。台湾に来て以来、気温の上下の急には全く驚かされる。昨日は暑くて白地のゆかたに着かへたが、今日は又セルの着物でさへ冷え〜する。実に不愉快だ。

二十七日

終日雨が降り通し、寒くて不愉快で。

二十八日

終日雨が降り通し、寒くて不愉快で。

二十九日

終日雨が降り通して、寒くて不愉快で。

斯んな日には、独りで静かな室にとちこもって居たい。そして本でも読むか、何か落ちついた別の法方で慰められたいものだが。

三十日

雨。夕方霽れて、少しの間薄日がさした。晩は早速散歩。招魂祭なので、公園では楽隊をやっている。生ビールを呑みこんで胸をなで下ろす。

五月

一日

天気になった。あまりに遅すぎたけれども、天気になった。

二日

晴天。夕食後、三人トーシャを飛ばして名々の小さい彫刻を持って、井出氏の私宅を訪れる。井出氏の処には、生蕃物、外国物なか〜色々なものがある。殊に The book of the Dead といふすばらしい本を見せて貰ふ。十一時近くまでお邪魔して、帰りはいい気持で月を踏んで帰る。

三日 日曜日

夕食後、豊田氏を尋ねる。^{〔雷〕}電鳴、驟雨。十一時過ぎまで居て帰ると、また〜降雨烈し。但し、先日来の糠雨と異り、気持よき降りなり。

四日

晴れたり、全く曇ったりして、あぶなっかしい。夜は、江波と一時間程散歩して来る。

五日

今日からリーヤがやって来た。

快晴。とうとうほんものの暑さがやって来る。市場の生ビールがたまらなくうまい。いい気持で帰って来ると、豊田氏が来てゐた。

六日

晴。午後、^{〔雷〕}電鳴、驟雨あり。

夜、皆で、新世界に活動写真を見にゆく。「大地は微笑む」前篇。自分が活動写真を見るのが数年振りだ。美術学校の二年か三年の頃に、友達につれられて浅草で「カリガリ博士」を見たのと、その時分、岩村から切符を貰ったので、有楽座で「妖婦イムペリア」を見ただけだ。日本のものでは、それこそ十年も前、恵比寿に居た頃、なりもの囃入「旧劇」だの、所謂「新派悲劇」を少しばかり見たばかりなのだ。その頃から思ったら、実にすばらしい進歩だ。台湾に来たからこそ、日本の斯うしたフィルムにお目みえしたよ

うなものだ。それでなければ、恐らくはまだ三年や四年は活動写真小屋へさへ入らなかつたかもしれない。

七日

晴。夕方、風がなくて、今日こそ蒸々と暑い。だから、市場の生ビールがゴクゴクと咽にうまい。

八日

昼中暑かったが、夕方東風があつて涼しい。だから今日は、ビールでなくてコーヒーを飲んで来る。

九日

朝五時半に起きて、コツコツやり出したが、大掃除だといふので、半日かかって中嶋を外に追ひ出して、家の中外をかたづける。

午後、夕方前、豊田氏が来る。

十日 日曜日

今日は、両陛下銀婚記念日とて、昼間からそこらが賑はしい。夜外に出ると、大変な人が出て居る。提灯行列が長々と通る。夜雨。

十一日

快晴。夜散歩。

十二日

快晴。朝から澄んだ日が、がん〜と照りつけ気が軽い。台北州庁³⁴⁸)にたのまれものうちあはせに行かうと思つて居る処へ、総督府³⁴⁹)から電話で、先日井出課長から話のあつた模型の荷をほどいたから、直ぐ見に来てくれといふので、十時に三人で総督府に出かける。模型は三間に五間といふすばらしい大きなものだった。三四日うちに場所を借りて、ぼつ〜手をつけることにして総督府を出、栄町で簡単に昼食。公園で長いこと休み。その間に博物館に入る。二時に三人で州庁に行く。ここでは、総べての交渉を中嶋がしてくれる間、一時間余またされる。それから、役所の篠原氏と(中嶋は勞れたので、ここから帰つて貰ふ)満華の仁齋院³⁵⁰)を見にゆく。仁齋院は、満華の駅の向ふで、街のとつばなで、静かな所だった。病院も静かだったが、ただ癡狂室の中で若い女が声をからして恨んだり、怒つたりして居た。龍山寺で篠原氏と別れて、歩いて夕方家に帰つて来る。

十三日

十四日

天気が続くのでありがたい。今日からいよいよ州庁に仕事に出かける。午後篠原氏と大稲埕の仁斎院支部を見にゆく。これも、大稲埕のとっぱなで、ここは又精神病患者ばかりはいつて居る。それは、豚小屋よりも酷いと思はれるような処に、気を失った人々が訳も知らず静かに入って居り、無意識に字義通り、吠えて居る。あらゆる世の中の悲惨な空気をたたへて居る。仁斎院を出て、篠原氏の案内で台湾神社に参り、劍潭寺を見て篠原氏と別れ、圓山駅から汽車で台北に帰る。夕食をうまく食べて井出氏を尋ねたが、留守だったので、街に出てビールを。そのうまいこと。

十五日

州庁から帰りに篠原氏と苗甫にゆき、篠原氏の処で晩飯を御馳走になる。ビールを足る程飲んで、いい気持で十一時前帰る。

十六日

晩、大正街に井出氏を尋ね、十一時に帰って来る。暑い、暑い。だが又気持がいい。

十七日 日曜日

昨晩は寝てから、夜中恐ろしい雨が降ったが、今日は降り止まないで、東風が涼し過ぎて、さて気持が悪い。日曜日だったが、州庁に行く。間もなく篠原氏がやってくる。昼には三人で榮町まで出て腹をつくり、又々州庁に帰り、仕事を終へてから、篠原氏の顔を油土でスケッチしたが、思ふようにうまく出ない。夕方帰る。昼間のうち止んで居た雨が、又々降り出す。気がむしゃくしゃする。

十八日

降ったり止んだり。

十九日

雨。馬鹿臭い!

二十日

雨は止まない。寒い。どうにもならない。雨が降るとつくへ思ふ。本が落着いて読みたい。台湾に来てから五十日の間、落着いて本を読まない。生活自体が外面的過ぎる。朝から夕方まで州庁に行く。だがこれはよろしい。夕方帰って来ると、只飯がうまく、風呂が気持がいい。それから天気ならば、必ず町に散歩に出てビールを飲む。これも只

うまい。それから、雨の日はトランプをさせられる。決してつまらなくはない。だが。独りの時が全くない。例へば急に二身一体となったような不自由を感じつづける。馬鹿になったようでもある。

二十一日

雨。

二十二日

雨止んで。但し日光は僅かにのぞいたきり。蒸々しするから、明日は晴れるだらう。州庁に行つて、本町に行つて、州庁にかへつて、総督府に行つて、州庁にかへつて、五時過ぎに勞れて帰つてくる。

二十三日

とうとう天気になる。だが今日は、州の仕事をしくじつて、一部分全くやりかへなければならなくなる。

二十四日 日曜日

朝早く、総督府へ行き、昼食を外でとつて州庁に行き、夕方帰る。日中はすばらしい天気だったが、午後雷雨あり、そのまま雨になつてしまふ。

二十五日

終日雨。相かはらず、総督府と州庁をかけもちで、日暮まで機械のように働く。帰つて来ると、江波に電報が来て居る。東京の家に不幸のあつたことは確かだが、誰方がなくなつたのか、わからない。皆であまり突然なので、御祖母様だらうなと^{【推カ】}押思つて居る。

二十六日

時々空がきれて、日さへ見えたが、そんな間は五分と続かないで、つまり終日雨が降つて、気持ちが悪く憎々しい。江波の処へ二通の電報が来たが、それは昨日の電報より前のもので、宛所がちがつて居た為^{【推カ】}に延着したので、江波の御尊父のキトクが報ぜられて居る。なくなつたのは江波の御尊父で、誠に突然でもあり、御いたはしいことであるが、江波は仕事が半ばなので帰らないといつて居る。

二十七日

駄目だ。又雨だ。

夕方どうやら晴れる。明日こそ晴れてくれ。

二十八日

昨夜は、江波が隣りで苦しいまでに寝られないで悶へるので、自分も寝られない。とうへ〜起き上って一時過ぎまで話して居た。そんな風で、今日は寝足らはない気が何処かです。だが見よ。晴天。われながら機嫌好し。

二十九日

晴。

三十日

晴。秩父宮が今日台北に御着とて、街はお祭騒ぎの賑やかさだ。総督府の帰り、栄町の処で本郷人の奉祝行列に合った。萬華の祭の行列と全く同じもので、更に盛な騒々しい、出鱈目なものだ。江波が始めて見るので、しまいまで立って見て居る。夜は、一寸東門まで出て、提灯行列を見る。これは又、集まったものだ。総督府前から東門まで、東門から更に三方に別れて列なる提灯の海が、歌と万歳とで静かに動き去るまで、総督^(邸)官庭の三階からタキシードで殿下が御答礼になる。

帰って来てすぐねる。

三十一日 日曜日

暑い美しい日だったが、午後猛烈な驟雨あり。丁度、総督府からの帰りで、つぶ濡れにぬれて帰ってくる。

六月

一日

晴。午後猛烈な驟雨あり。

二日

晴。

三日

晴。

四日

晴，驟雨アリ。

五日

晴。

六日

晴。驟雨。

七日

晴。驟雨。そのままたら〜雨になる。

八日

晴。今日は、又大変に涼しい。

九日

昨夜一夜寒い程に冷え〜と涼しい。今日も亦涼しい。僅かに驟雨。

十七日

馬鹿らしく急^{〔忙〕}がしい日が続いた。

総督府苗圃州庁博物館。何時にはどこへ、一時間の後にはトーシャで街を縫ふようなことを、そして仕事、仕事、仕事と。けれども其れらも昨日で完全に終って、州庁からは已に三百円を受取ったが、これは随分苦しみもしたが、又、恥づかしい仕事でもあった。昨日は愈々江波が一人先に帰京することになったので、午後、基隆まで送りに行った。篠原氏も来てくれたので、帰りに篠原氏とライオンでビールを矯^{〔矯〕}った。二三日雨で困^{〔困〕}って居たのに、今日は曇りながらも止んで居たので、朝早く苗圃^{〔圃〕}に行つて、理蕃課の即売品を、蕃布、人形、パイプなどしこたま買ひいれ、街に出てお土産物をととのへて来る。午後ひどい雨が降ったが、夕方止んで星が出る。明日は霽れる。

十八日

夕立の後、久々で林能光^{〔熊〕}の処を尋ねたが、折悪しく夫婦で大阪に行ったとのことで、その足で大稲埕に林履信を尋る。丁度、台北橋の渡り初めて、大稲埕は非常な賑ひだったので、履信と二時間程も其辺を散歩し、小さな雨が降りだしたので、九時半に分れて帰つて来る。

十九日

昨日、履信と約束したので、夕方履信を尋ねる。又、東蒼芳で御馳走になり、幼仔を呼んで歌はせ、後幼仔の家に行き、幼仔はお化粧をしなほして萬華の川辺に行く。三人

で栄町まで歩いたが、更に苗圃に出かける。遅いので何も見られなかったが、心残すこともなく。十二時過ぎて家に帰る。

二十日

今日、うまく金が入った。九百八十五円。これは亦、お役所らしい煩雑の中を、裏を押し、横を叩いて、昨日などは、中寫とかはるがはる井出氏をさへお尋ねして、漸く期日に間に会った訳だ。ペンキ屋の払ひもすませ、郵船の切符も買った。明日は出発だ。

午後は荷造りに追はれ、晩は豊田氏が来る。

二十一日 日曜日

朝、篠原氏を尋ね、豊田氏を尋ねたが、留守。家に豊田氏は来て居た。朝のうちに、豊田氏と駅に荷物を預けに行き、豊田氏宅で、皆立派な昼食を御馳走になり、一時五十分の汽車で台北を立ち、吉野丸に乗り込む。海浪穏か。

〔欄外に記す〕
〔(アジンコートの沖)〕

私達の船は十八ノットか或は十六ノットで走り続けた
夕方私は右舷のプロメネイドデッキに居た
籐の寝椅子に長々と横たはって
日暮の異様なまぶしさの中に
目をそばめて彼方の青い只一筋
遠い水平線を見つめて居た
其処に眼の中に一つの嶋があった
あゝ、赤い、焼爛れたようなぎざぎざな寫
遠い水平線から突き出て、突立ってゐる
動かない、赤黒い塊、寫
私は寫を見た
私は異常に苛立った
私は深い疑ひに追はれた
私は寫ととっくみ合った
私は動かないで遠いあの寫と争った
私は労れたようだった
嶋が投げかけ投げかける魔魅
私は感覚の幻をほぐさうとあせったが無駄だった
嶋は生きてゐる？

「嶋は生きてゐる！」
嶋は底知れず魯鈍な動物だ
嶋は永遠のデイクザウリアだ
嶋は澆刺と飛躍する外的生命ではない
嶋は底に蹲る命の床だ
嶋は眠る
眠って眠って
幾千年の瞬時を一息に眠る
だが又嶋は遂に覚める
嶋は恐ろしい夜と神秘の中に覚める
あゝ、あの嶋は幾千年の瞬間の眠りの後に
あゝ、誰も知らない恐ろしい夜
神秘の中に覚めて
何事ぞ、神のような力を現はすのだ
そして神のような力を誰にも知られないで
再び嶋は眠って了解
幾千年を瞬時のように眠って了解
あゝ、焼爛れたような、赤黒い塊
動かないぎざぎざ、まぶしい嶋
私は嶋を見たのだ、生き物の嶋を
私の見たのは
それはベックリンの見たといふ「死の嶋」ではない!³⁵¹⁾

二十九日

穏やかな航海の後、二十四日の朝、私達の船は門司に入った。私は中嶋の奥サンと南チャンとを送って上陸し、汽車に乗せて、町をぶらへ歩いて、十時半のランチで船に帰った。内地は梅雨があけないので空が重い。十二時出航。二十五日朝、神戸に入る。中嶋とここで別れ、私は三ノ宮駅に荷物を置いて芦屋にゆき、午後大阪にゆき、晩八時七分の急行に乗って、東京に帰って来た。二十六日午に家に帰り、二十七日には、江波を尋ね、一緒に石膏屋にゆき、私はその足で、夕方鎌倉に行った。一晚宿って二十八日昌道をつれて帰京。後から梅子叔母様も出て来られ、晩方昌道をつれて帰られる。私はひどく疲れて来た。昨日は早く床に入った。

夕方江波の処へ行く。原瀬、宮田も集って、知治サンと五人で銀座に出る。

〔欄外に記す〕
[✓富士川の河原に咲ける月見草ひろびろ咲けりまだ繁くあらず

✓朝曇る富士川原への月見草の黄のさわならず梅雨あくる頃を³⁵²⁾

三十日

原瀬が来る。午後、原瀬と一緒に原瀬の今度の家へ行って来る。夜、兄に誘はれて恵比寿に出る。

七月

一日

雨。

二日

夕方小石川へ行ったが、お留守なので神田にまはって早く帰る。

三日

三沢が来る。

四日

五日

三沢の所を尋ねる。

月の夜のキャナルの堤で

バナナの皮をむき乍ら いつまでもいつまでも
とりとめのない話をして居た私達です

キミエさんが遠い遠い西の国へ

帰って行く時、行ってしまふ時

私にのこしてくれた挨拶でした

サヨーナラ、私は楽しかった

楽しかった此の一夏と一緒に

いつも――あなたのことを思ふでせう

けれども、サヨーナラ、私は今は

未だ見知らない夫へ嫁ぐ為に

お別れして行かなければなりません

今迄もそうだった様に 私は
運命には逆らはないことにしませう
私の悲しみは思出の中に硝子のようになるでせう

〔二頁白紙〕

TLINKIT u.HAIDA

〔5行省略〕

REICH DER INKA

〔6行省略〕

Peru II

〔3行省略〕

MEXIKO II

MEXIKO III

〔11行省略〕

^{〔見返し〕}
〔府下 高円寺六一九〕